琉球大学学術リポジトリ

首里城正殿大棟龍頭棟飾りについての考察

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/940

首里城正殿大棟龍頭棟飾りについての考察

西　村　貞　雄

A Study of Dragon heads on the Ridge of the Main Building of Shuri Castle

Sadao NISHIMURA

ABSTRUCT

On the state chamber of Shuri castle, there are many uniquely shaped molded art works.

One of them is the ryu−to (dragon head) ornament fixed at the ends of the o−mune (main ridge) on the top of the roof.

Based on my study of the reliefs of the Ryukyu dynasty period and others not of that period, I will touch on what the Dragon Heads on the Ridge of the Main Building of Shuri Castle shoud be.

一、はじめに

城や宮殿、仏殿等の屋根の形には、それぞれの国や地域によって育まれた形態がある。そこには、その土地の風土によって造り上げられた背景があり、歴史がある。

首里城正殿の屋根は、自然現象と歴史的変遷の中から形造られた。その形は、守護と共に象徴的な意味をもっている。屋根は、その構造や大きさを見ただけで、人間が庇護されていることを象徴しているものと考えられる。人々は特に、雷雨や豪雨、暴風などの時、屋根の下にいると、安全に守られていることを感じる。この印象をなお力を込めて象徴的に強調したのが、屋根の要に当たる飾りの部分であろう。その象徴的な存在の一つとして龍頭棟飾りがある。この稿では、他に例の無い首里城正殿龍頭棟飾りについて考察する。

二、龍頭棟飾りの意味

日本の建築物[1]には、城では天守に鯱、宮殿や仏殿等には鳥の尾の形をした鴟尾等が大棟の両端に取り付けられている。しかし、首里城正殿の屋根には、尾に勢いと緊張感のある形ではなく、大きな龍頭が取り付けられ、大棟の両端に棟を噛む、勢いのある形で存在している。また、正面唐破風の屋根にも龍頭があり、大きな口を開け威嚇する構えをとっている。

首里城正殿では何故龍頭なのか。鴟尾でも鯱でもなく、形態も繊細な形はとっていない。棟飾りはいずれの地域でも水との関係がある。龍もまた水と深い関わりがあり、この事によって首里城正殿に龍を取り入れていると思われるが、最も大きな要因としては、歴史的背景から琉球王朝時代の交易を通して、政治や社会面などに中国の影響が著しかったことが挙げられる。特に紫禁城に皇帝の象徴として龍が施されていることも、要因として考えられる。首里城正殿に龍が取り入れられたのは、王城として、王の象徴と同時に守護を目的としたためと考えられる。

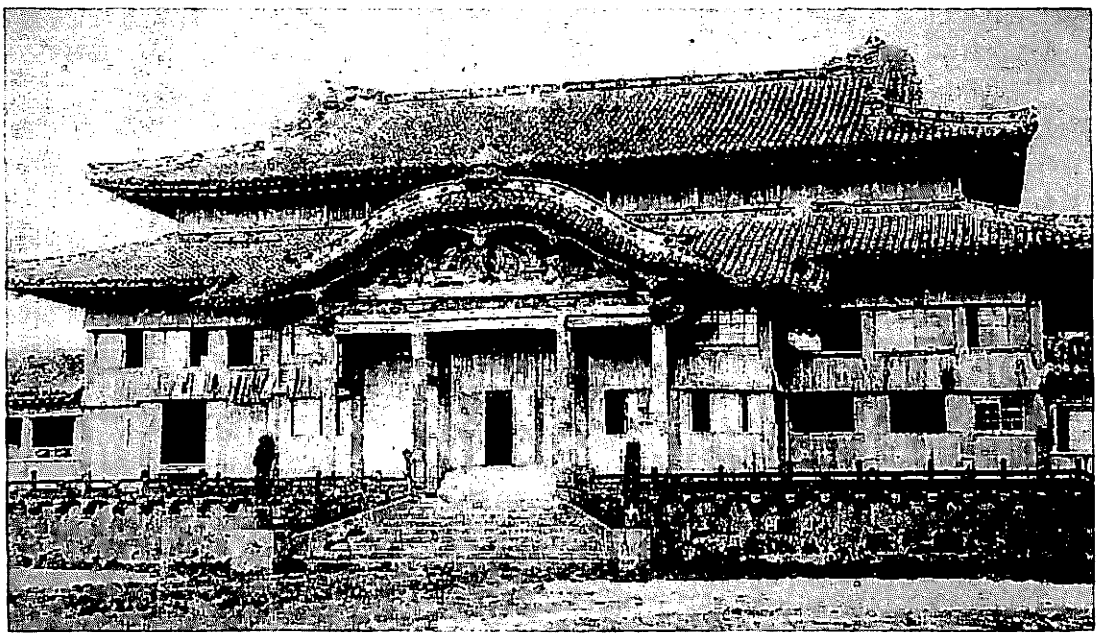
古来中国[2]では、水から連想される雨、雲、雷（稲妻）を龍の象徴とし、これらを基に、水神の

Department of Sculpture, Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.

性格を備えた龍についての形を、具体的に造り上げていったと考えられる。強い要素をとりいれた架空動物（龍）には、アニミズム的思想が入ってくる。強い力を持った龍は、自然の脅威から人々を護ってくれるとされ、皇帝の象徴として、また屋根の要として取り付けられたと考えられる。

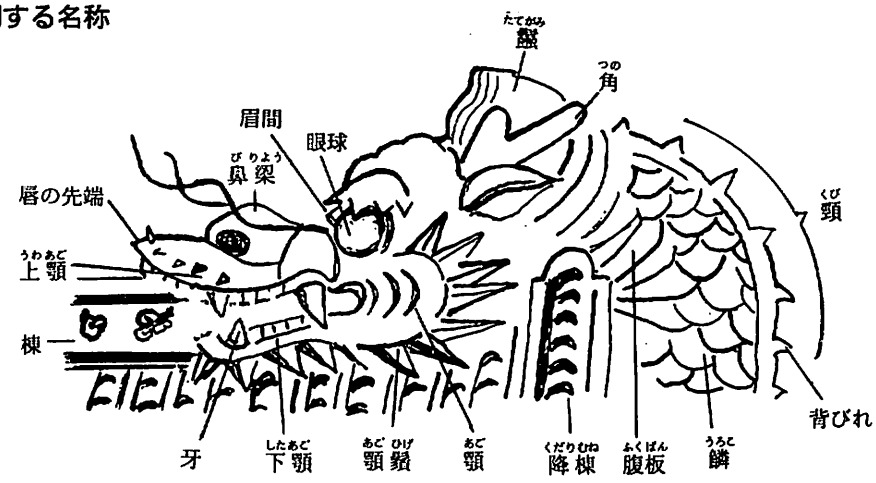
首里城正殿は、板葺き屋根の時期もあり、火災による恐怖もあったと思われる。焼物の技術導入によって屋根が瓦葺きに変わり、より良く堅牢なものを取り入れる事によって、屋根の形や棟飾りにも工夫がもたらされたことが、龍頭としての風格を作っていったのである。

最も原形をとどめている写真をもとにして造った縮尺石脊像③

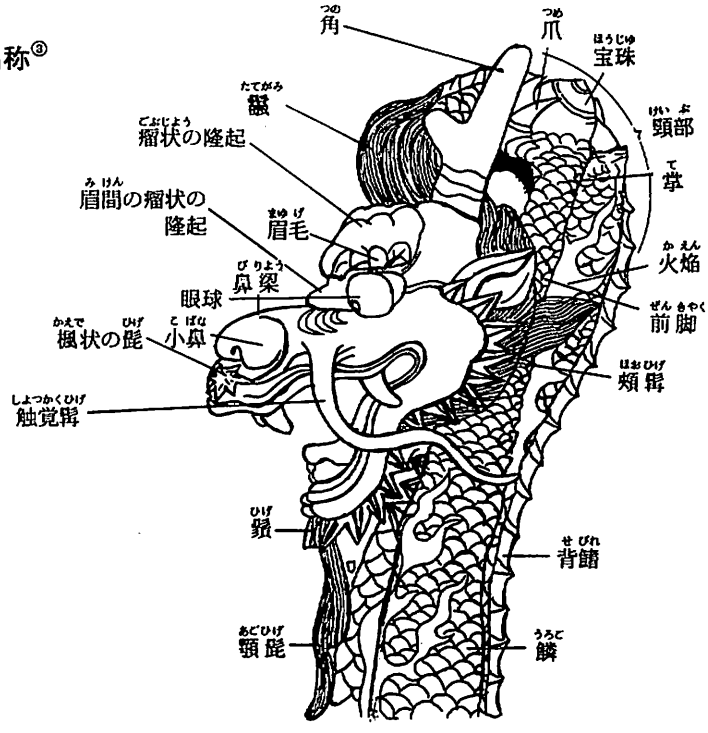


明治末撮影「写真集　沖縄④」より

・龍頭に関する名称



・龍柱に関する名称③



三、首里城正殿の屋根

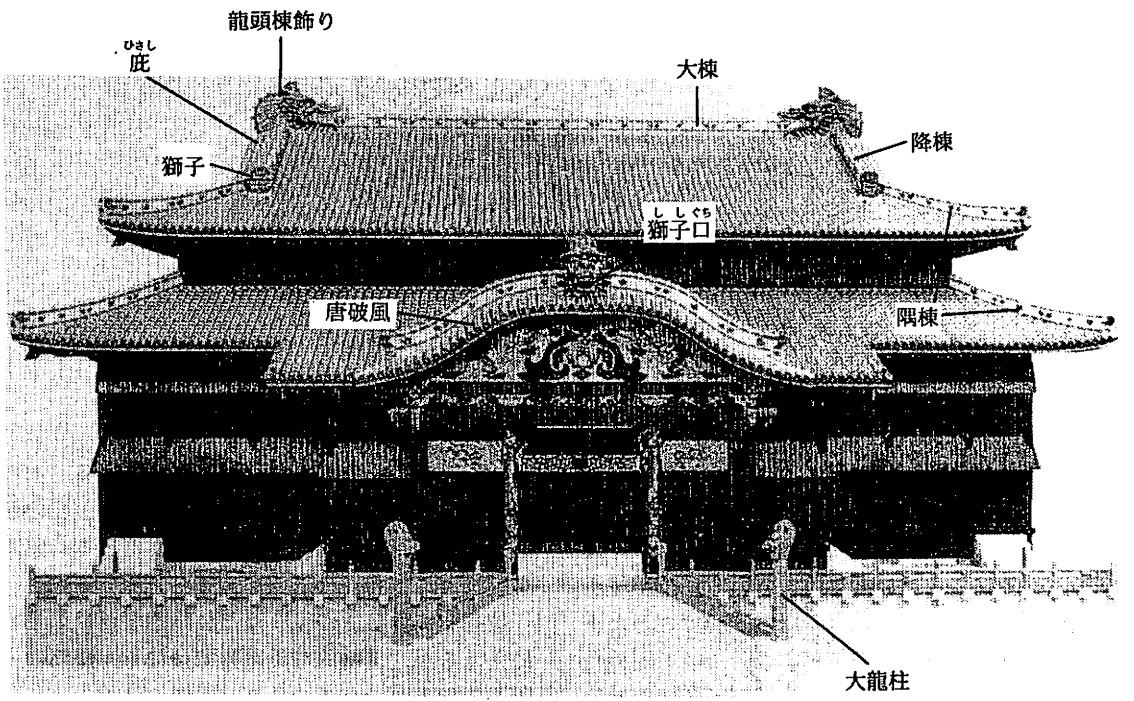
屋根の形はどこの国でも象徴的な意味と、守護としての意味を兼ね備えて持っている。首里城正殿は入母屋造りで、赤瓦を配し、漆喰で固めた重厚味のある屋根である。板葺きから漆喰で固めた赤瓦になるまでには、時代背景と自然条件の制約があり、その中で育まれた形となっている。木造本瓦葺きに唐破風を取り入れ、大棟と唐破風の獅子口に龍頭を配置して、中国的要素と日本的要素を取り入れて独自の形態を造っている。

龍頭棟飾りは、一見、ただ装飾的なだけのものに見えるが、装飾的な添え物ではなく、建築の一部として重要なものである。屋根の稜線の美しさ

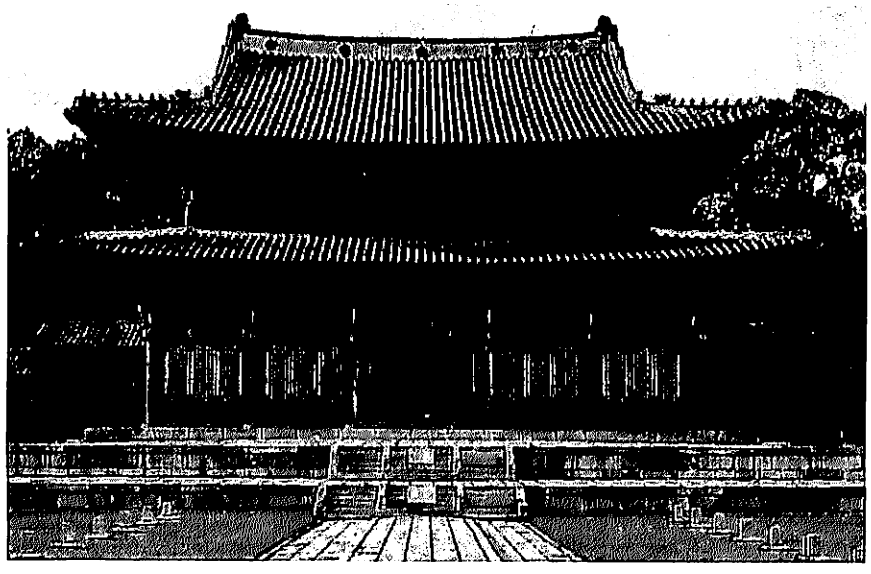
を作る要素もここにあり、屋根の要に当たる所でもある。

日本の城[1]では天守に鯱があり、魚の反り返った姿をとり、尾に勢いがある。また唐招提寺金堂には鳥の尾が曲ったような形の鴟尾（沓形ともいう）があり、いずれも先端が反り返って緊張感を与えている。また、隅棟の形にも反り返ったものが多く、屋根の特徴を作っている要素となっている。しかし、首里城正殿の隅棟は僅かに反りが入っているだけで、龍頭棟飾りは、むしろ量的な形で大棟の両端から中央に向けて勢いを与えている。つまり、隅棟が外に広がりを造るのに対して、大棟両端の龍頭棟飾りは内側に力を溜め込み、唐破風の獅子口にあたる龍頭が、御庭に向かって大きな口を開けて威嚇する構えをとる形で構成されている。龍頭は低く構えさせた重厚味のある形であり、それには素材（赤瓦、漆喰）との関係と、台風等の気象条件とが要因として考えられる。中国の屋根には、龍が頻繁に使われている。紫禁城の太和殿の屋根にも龍が造られているが、大造りではなく、こじんまりとした形で、正吻と一般には言われている。[6] 龍そのものを形造るのではなく、アレンジした形で造られ、顔面が棟を噛む形をとっている。正吻の側面には、龍の全身の浮彫が施されている。紫禁城の他にも、龍そのものを細長くした形をそのまま取り付けたものがある。

首里城正殿の龍頭棟飾りは、中国の影響を受けているとも考えられるが、龍をそのままの形で再現しているのではなく、工夫に工夫を重ね、独自の形態を造り上げている。しかし、何故量的な形態が取り付けられたのか、それは園比屋武御嶽石門の棟石両端にある鴟吻にも共通するところである。鴟吻の形態は、一見、鯱にも似ているが、尾の立上がりはあまり無く、僅かに弧を描いた形であり、中国の漢時代の形を受継いでいるようにもみえる。園比屋武御嶽石門は、木造建築の唐破風の様式を模して造られている。このように木造建築を模して造られているという点では、中国の泉州市開元寺にある石塔にも類似しているが、様式的には日本の建築を、材質や表現には中国的要素を取り入れている。園比屋武御嶽の棟飾りは材質に合わせて量的に造られていると思われるが、形態の発想は風土からの要素も大きく、龍頭棟飾りにも共通するところである。

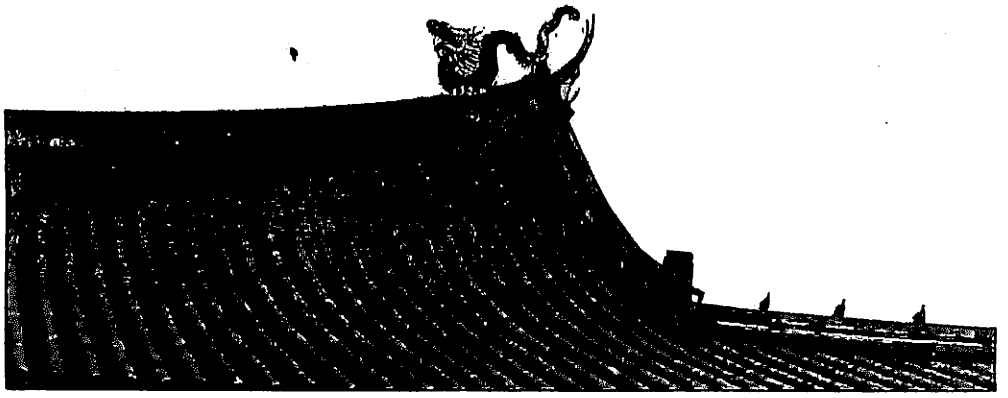


・屋根・棟飾り比較

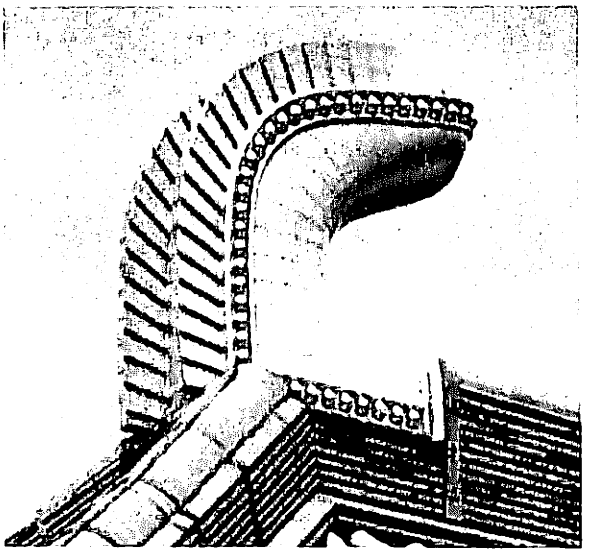


韓国　仁政殿

日本　弘前城⑥

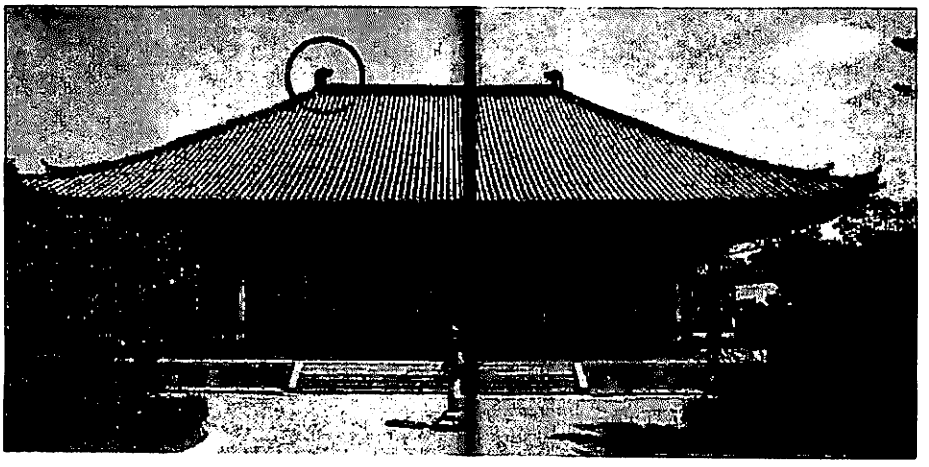


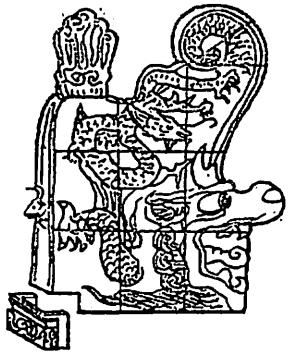
中国
龍全身をいれた棟飾り



棟飾り拡大
鴟尾

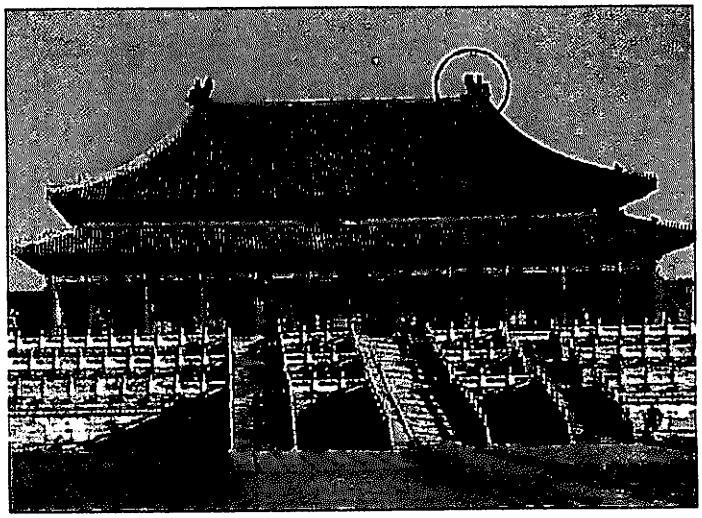
日本　唐招提寺金堂



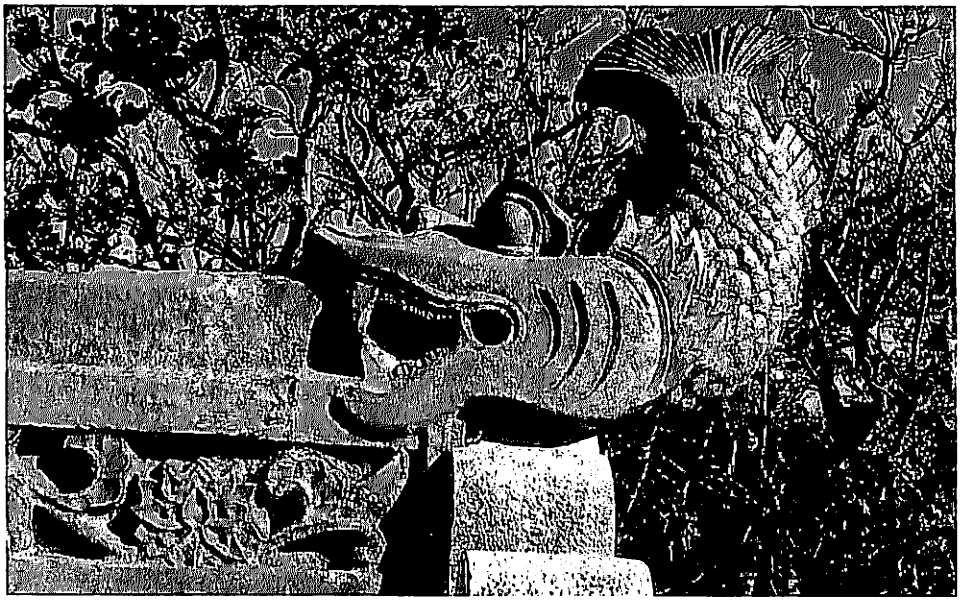


正吻拡大図

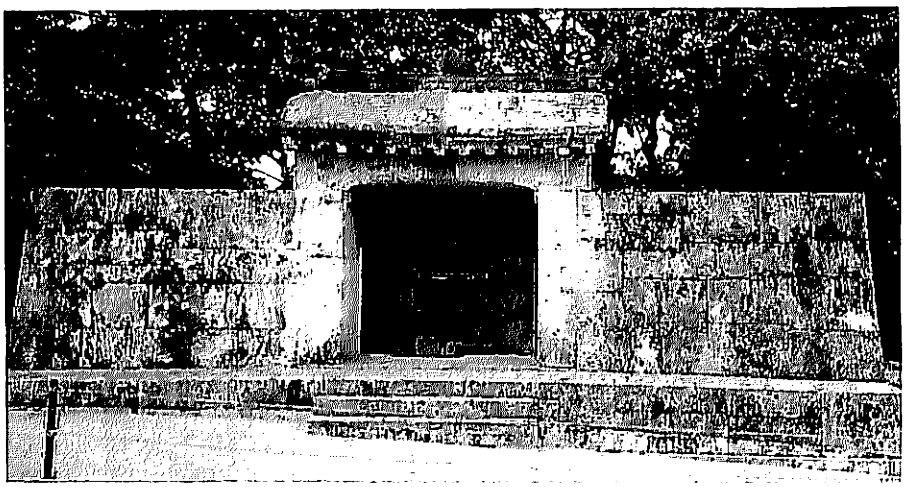
棟飾り拡大　正吻⑥



中国　太和殿



棟飾り拡大
鴟吻



園比屋武御嶽石門

四、龍頭棟飾りの形態について

首里城正殿の龍頭棟飾りの様に大きくて量的な棟飾りは、他に類例が無く、独自の風格を作っている。この形態は、王朝文化を象徴する形であり、形態に拘りをもつことの産物である。

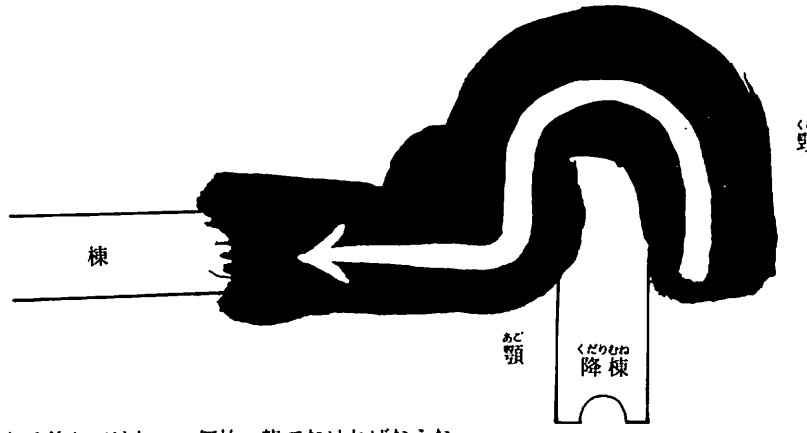
龍頭の形態は、台風や豪雨、炎天下の気象条件に耐えられる形、守護としての意味付け、王城としてのシンボルなど諸々の要素が付加され、王朝時代の英知と洗練された技量によって培われたものである。屋根の占める面積と龍頭との比率は、諸外国の建物には無いものである。

大棟の龍頭は、屋根の中心に向かって構えている。大棟の両端にある庇(ひさし)から降棟(くだりむね)を登り、大棟に

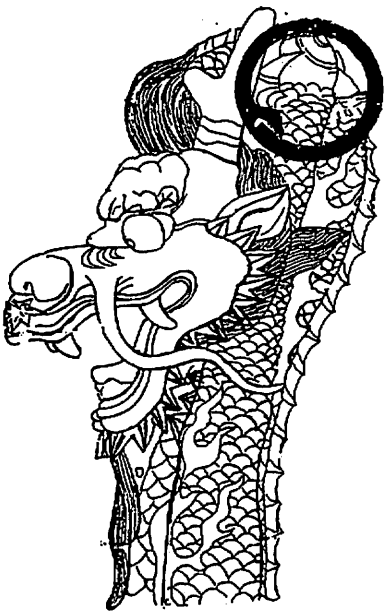
食い込んで噛んでいく形に龍頭を造り、屋根に張り付くような形で、勢いと精悍さを造っている。降棟と龍頭の頸の内側に当たる箇所、凹部になっているところが、龍の腹板であり、強い曲勢を造って、背鰭が描く弧の印象を高めている。龍の頸は、柱を伝わってくる胴体を連想させ、大棟を抱え込むような感じを与える。顔面は分厚くは取らず、大棟に馴染ませており、顎は棟の延長線上にあり低く構え、下顎の顎鬚が瓦に張り付くように連なり、放射する形は顎から鬣に弧を描くように反り返り勢いをつけている。角や耳が外に向かい傾斜していることによって、精悍さが一層引き立っている。瞼はほとんど水平に造られ、鋭い眼球が睨み付けている。上唇は棟の水平線にそって位置づけられ抑揚が与えられている。尖的な口先、堅牢な鼻、鋭い眼球、精悍な鬣は、独自の風格を作っている。この龍頭には、阿形、吽形の表現があり、牙の開閉と唇の抑揚、鬣の変化で区別をつけている。自ら工夫した形態への拘りは、王朝時代の美意識の高まりであり、単発的に出来るものではないと考える。

・龍頭の構える形態

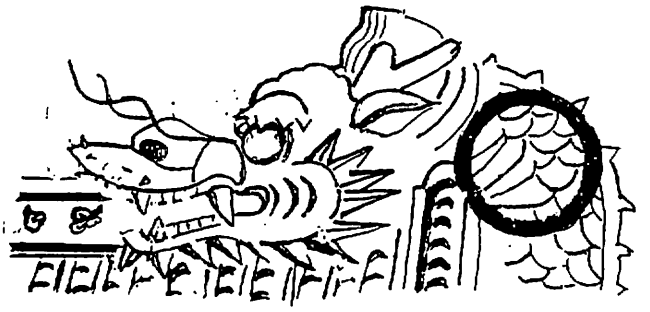
縮尺石膏像



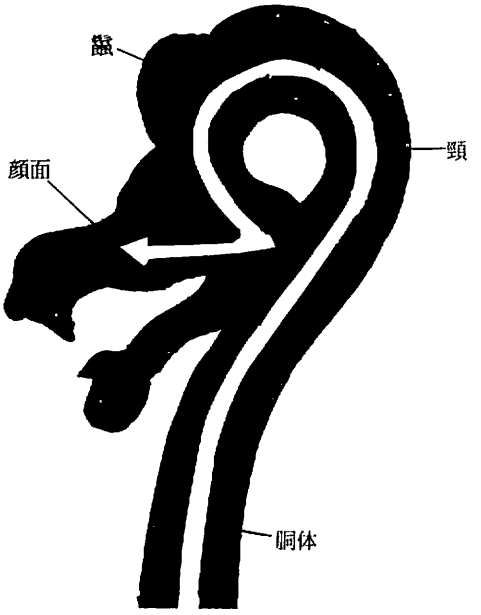
龍頭は、単なる飾りではない。何故、龍でなければならないか、歴史的にも、形態的にも、意味がある。この龍は、降棟の上を這って棟を噛んでいく形態である。頸の曲りに勢いがあり、それに伴って顎を低く構え、棟を飲み込んでいく様子である。矢印の方向がそれを示す。



大龍柱（阿形）の
頸の表現
○印の箇所は、頸の位置である。
その曲がりに前脚が宝珠を握っている状態を示している。



龍頭棟飾りの頸の表現



・龍柱の構える形態

龍柱は勾欄（こうらん）の親柱として考えられた独自の形態である。頭部は鎌首を持上げて構え、威嚇している形態で、矢印の方向が示すように、上部の丸くなっているところが頸である。

五、形態の変遷

龍頭棟飾りの復元に当たっては、最初の手掛かりとして、今まで撮影された写真を収集する事から始めた（首里城正殿実施設計「彫刻」報告書参照）[3]。明治、大正、昭和（戦前）と撮影された写真は、写真集として印刷され出版されたものもあるが、幸にしてガラス乾板で保管されているものもあり、拡大し子細に検討するのに効果があった。戦前までの写真は、白黒写真であるので、古びた建物に生えている苔や色の退色で、細かい形を判断することに時間を費やした。写真は形の判断をするために、同一写真を濃く、薄く、その中間と三段階に分けて現像した。龍頭棟飾りのみを大写

にした写真は少なく、正殿全景を写した写真の中から部分拡大していく作業から入った。いずれの写真の龍頭も漆喰で造られているようで、苔（黒色或いは白い銭苔等）や汚れ等が付着していて、細部の判断が難しかった。また、撮影年不明のものもあり、龍頭を年代順に位置付ける事も容易ではなかった。

復元は正殿再建時の1712年を基準にすることが決まっていたが、資料によっては、古いものも取り入れる事になった。この龍頭棟飾りにも変遷があったようで、首里王府の史書「球陽」によると、1682年に正殿大修理の際、平田典通によって「五彩」の焼物とした記述があるため、今回の復元では、釉薬（うわぐすり）を施した焼物になった。しかし「球陽」には、龍頭の形態についての記録は無く、形を判断する基は、残された写真に置くこととなった。彩色が施された眼球部分が、残片遺物として琉球大学風樹館に保管されている。これは、故山元恵一教授が収集したものであるが、眼球の大きさから判断すると、龍頭の物としては小さく、正殿の規模が小さい時の龍頭の物なのか、或いは、降棟の獅子の眼球とも受け取れる。龍頭の資料としては、この他に昭和８年頃作成された「国宝建造物沖縄神社拝殿図」[7]（以下「拝殿図」という）が挙げられる。

龍頭の写真の内、首里琉染蔵の明治撮影のものと、「写真集　沖縄」[4]の明治末撮影のものは同一である。文化庁蔵で撮影年不明の写真が２種類。大正11年撮影と13年撮影のものが「沖縄文化の遺宝」[8]にあり、龍頭に変化がある。文化庁蔵の昭和修理後の写真と「写真集　沖縄」は同一写真である。

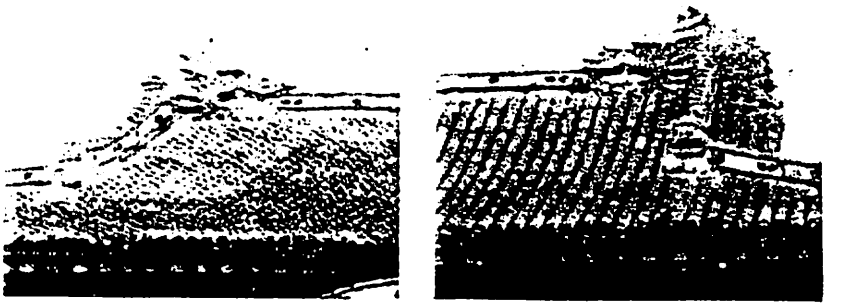
龍頭の写真は、６種類残されている。その中で最も精悍で威厳を感じさせるものは、明治から大正11年までに撮影された写真である。現在、健在である80歳代の古老達が、首里城（明治末から大正時代にかけての正殿）は「あの当時でも、建物は古びて100年以上経っていたのでは」と述べている。この様な事情を踏まえて写真を見ると、首里琉染蔵（明治、写真①）と「写真集　沖縄」、文化庁蔵（撮影年不明、写真②）、「沖縄文化の遺宝」（大正11年撮影、写真③）の龍頭には、造り変えられた痕跡は見えない。それぞれ撮影角度の違いはあるが、同一の龍頭である。

琉球国王は明治12年（1879年）の廃藩置県に伴い居を東京に移し、国王の存在を無くした首里城は、明治12年から29年（1896年）まで「熊本鎮台分遣隊営所」となる。その後、首里市立女子工芸学校、沖縄県立工業徒弟学校、首里第一尋常高等小学校等として使用されてきた。大正12年（1923年）に首里城が老朽化したため、首里市は正殿の解体を議会で決議し、取り壊す事になった。この情報を知った鎌倉芳太郎は伊東忠太に連絡をとり、取り壊しを中止させたが、すでに龍頭棟飾りは壊されかけていた[8]。龍頭棟飾りは大正13年（1924年）に再び造られたが、王朝時代からの職人の技術は途絶えていたため、本来の姿には戻らず生命感の無い形になってしまった。大正11年（1922年）撮影の龍頭及び降棟の獅子（写真③）と、大正13年（1924年）撮影の写真（写真④）とを比較すると、獅子には変化がなく威厳を備えているが、写真④の龍頭棟飾りは口元が偏平になり、龍の面影は無く海老（えび）を思わせる形となり、威厳や迫力も無い形態となっている。その後、修復を重ねるごとに、龍頭の形状は崩れる一方である。降棟の獅子も同じ変遷を後に辿っている。

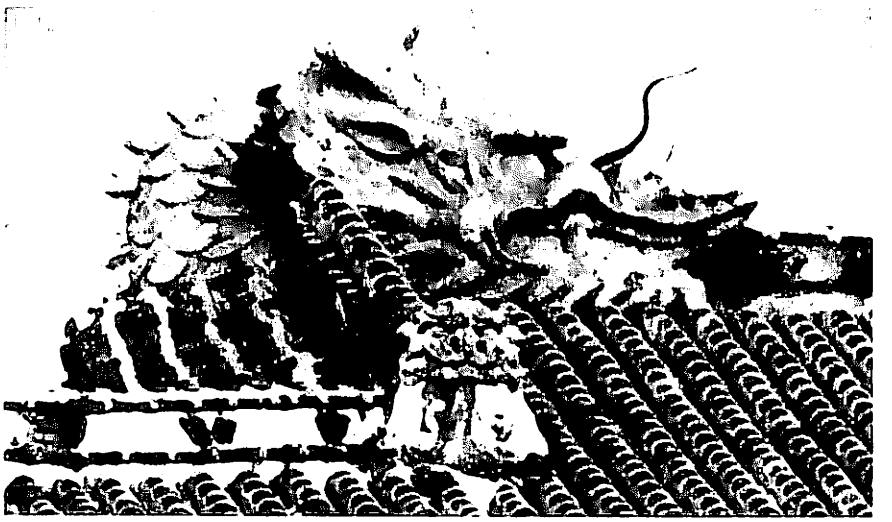
撮影年不明（文化庁蔵）の写真（写真⑤）では、龍頭は棟に合わせて低く構えているが、龍全体の比率が狂い、鬣が背びれに流れ、精悍さを無くしている。また眼球に鋭さが無く、口元にも力が入ってない。特に顎に盛り上がりが無く偏平で、生命感が無い。昭和修理後（文化庁蔵）の写真（写真⑥）も、全体に勢いが無く、丸い眼や鼻の穴が目立ち、口辺部が反り返って生き生きした要素を失っている。頸の放射状の腹板にも曲勢は感じられず、鬣にも動きが与えられていない。

以上の様な過程を見ると、王朝文化の名残を止めている形態は大正11年までであり、その後は形骸化した状態で、生命感のある形状を無くして、本来の棟飾りの意味である守護や権威の象徴としての形態を途絶えさせてしまっているのである。

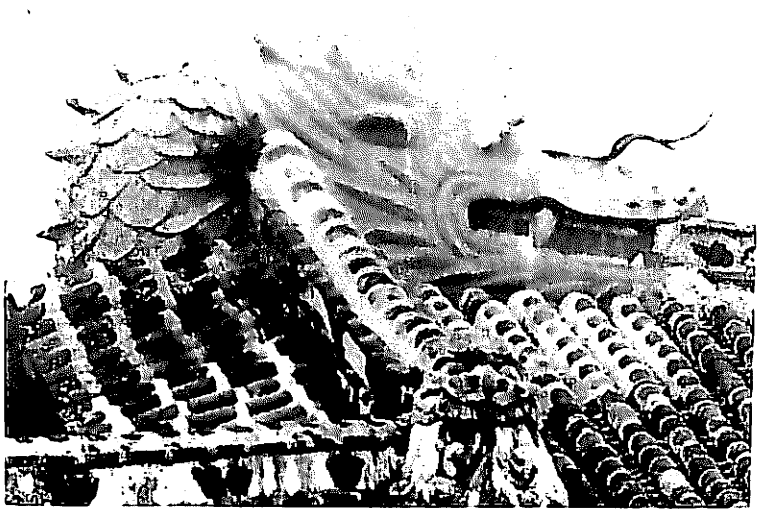
第二次世界大戦ですべてを失った沖縄にとっては、本来の龍頭棟飾りの形態を再現する事に大きな意味がある。それは首里城正殿だけにあり、その時代にしか造れない形態だからである。



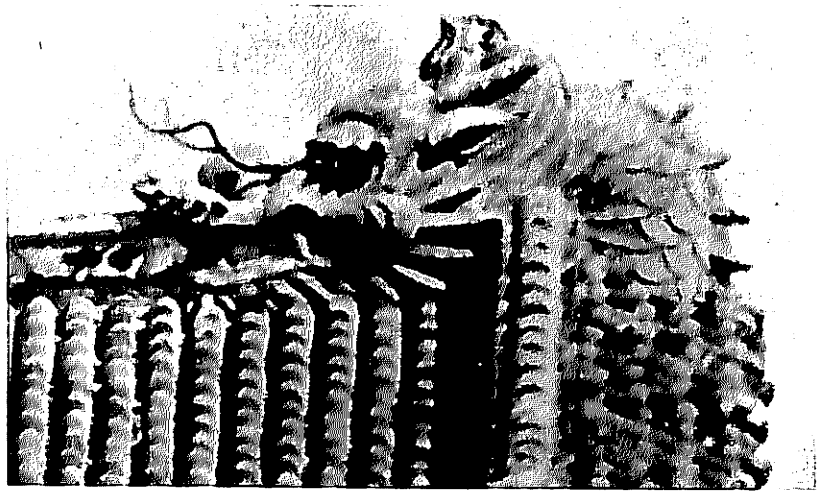
写真①　明治　首里琉染蔵



写真③　大正11年「沖縄文化の遺宝」より



写真④　大正13年「沖縄文化の遺宝」より

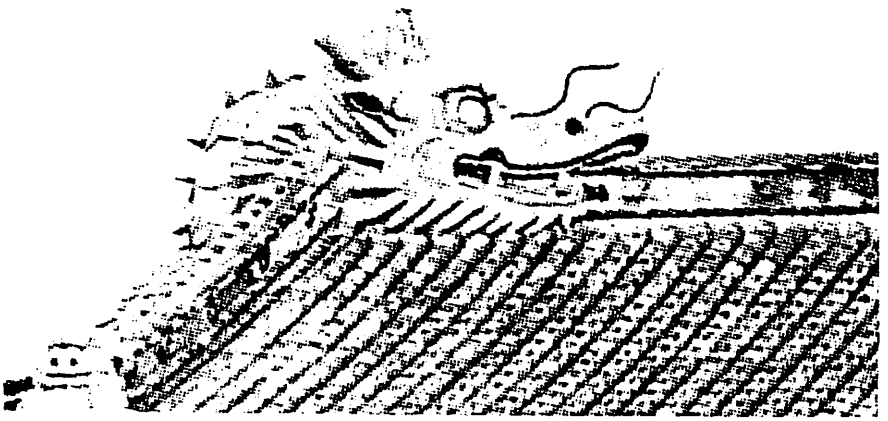


写真②　撮影年不明（文化庁蔵）

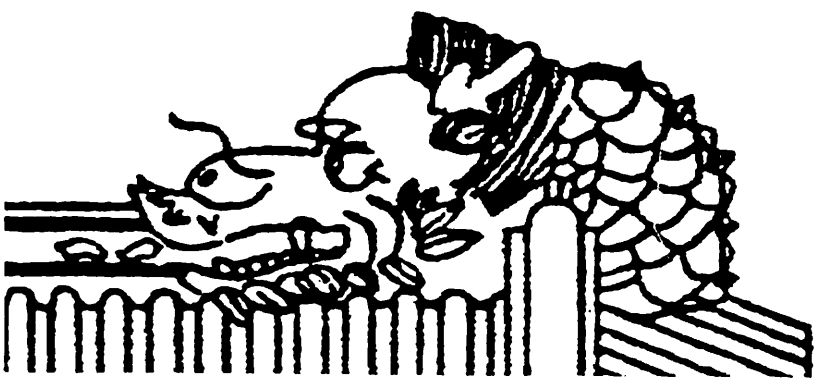
写真③　大正11年「沖縄文化の遺宝」より

写真④　大正13年「沖縄文化の遺宝」より

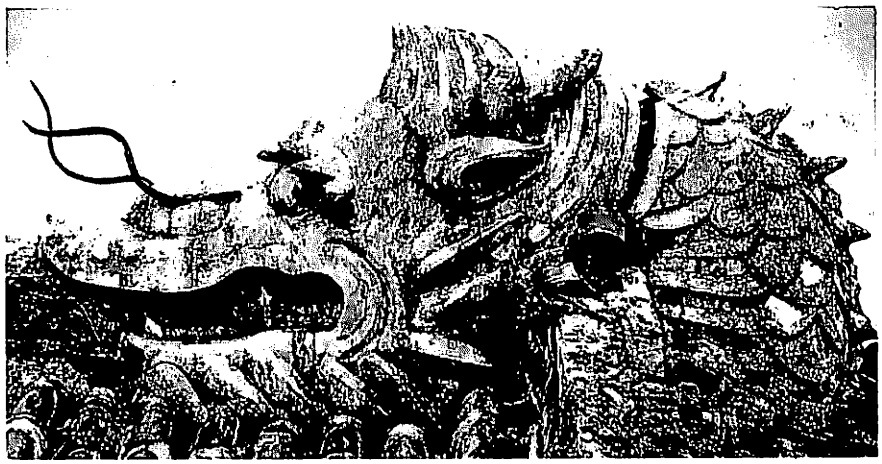
後面写真　撮影年不明



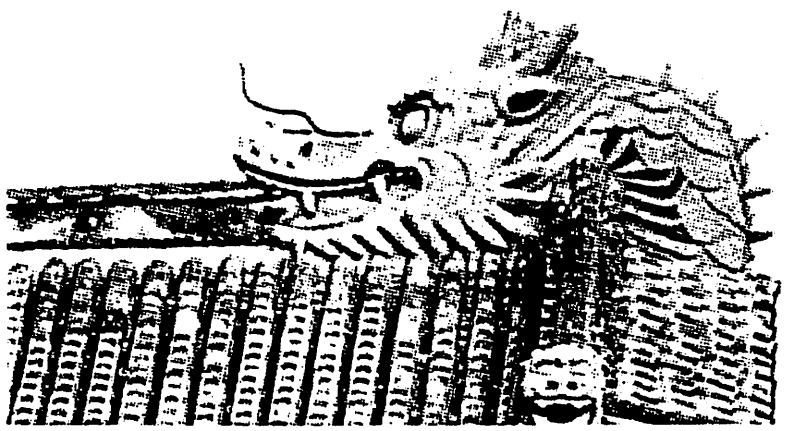
写真⑥　昭和修理後（文化庁蔵）



「拝殿図」より（昭和解体修理前の実測図面）

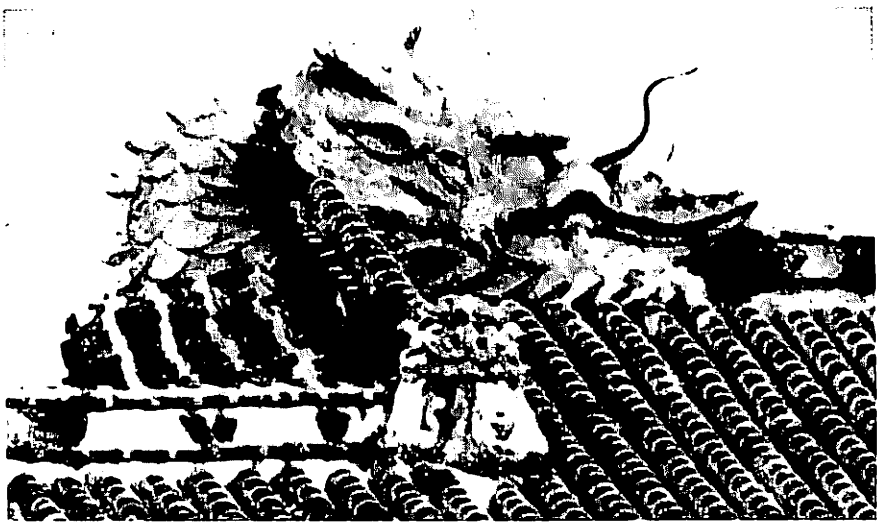


写真⑤　撮影年不明（文化庁蔵）

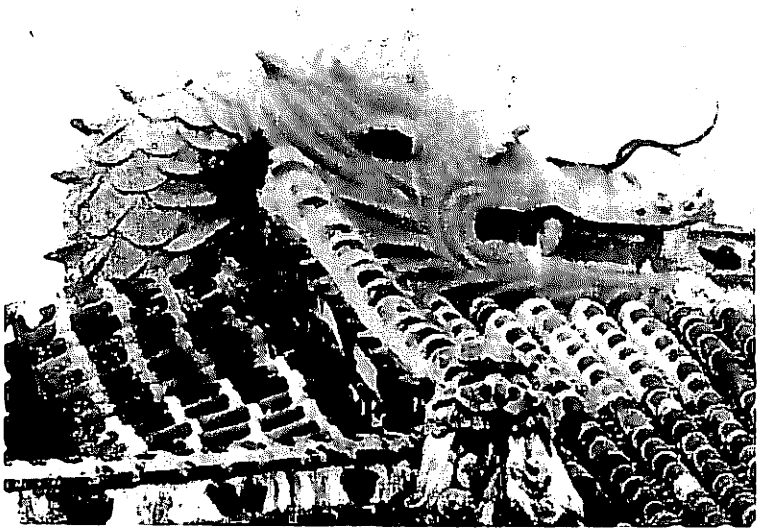


写真⑥　昭和修理後（文化庁蔵）

「拝殿図」より（修理後の図面）

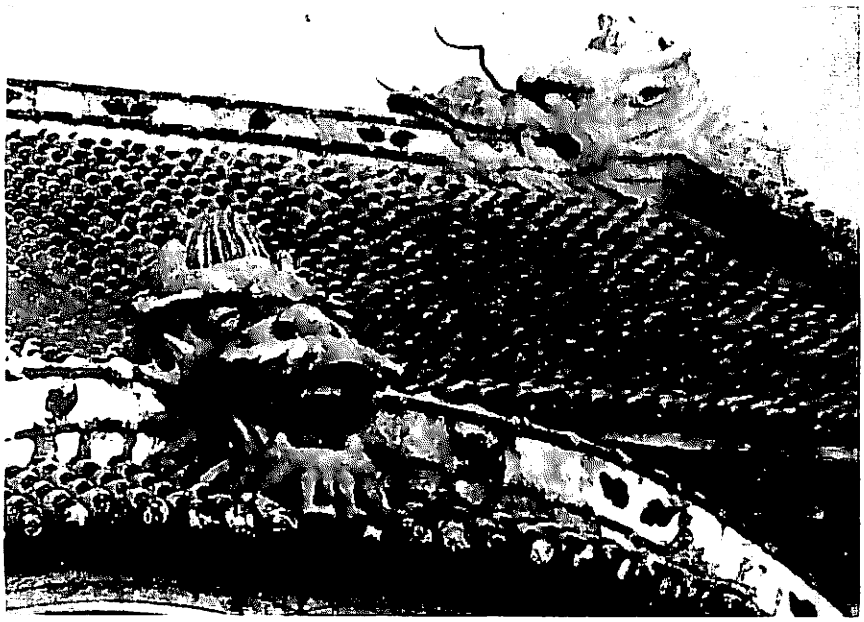


写真③　大正11年「沖縄文化の遺宝」より

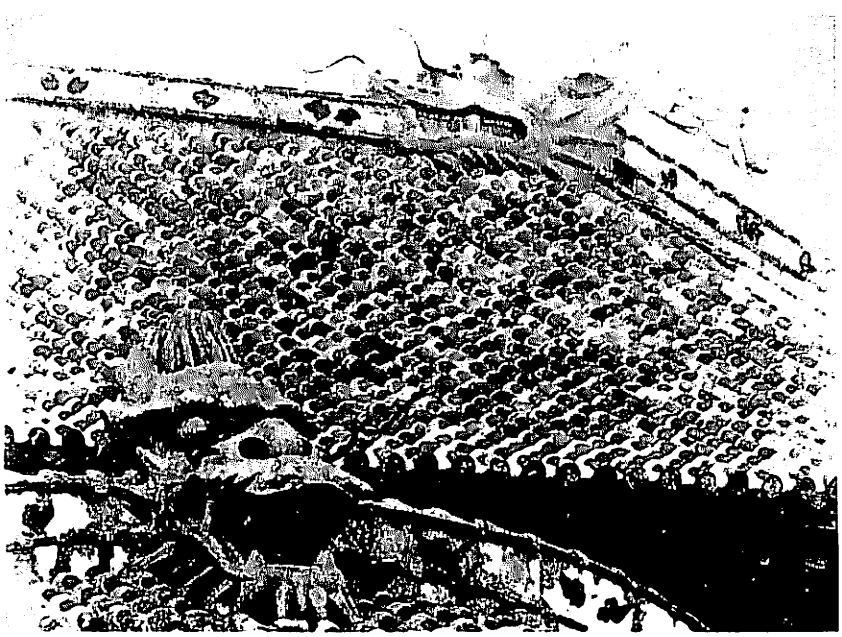


写真④　大正13年「沖縄文化の遺宝」より

大正11年（写真③・③－１）撮影と大正13年（写真④・④－１）撮影の写真を比較すると降棟の獅子と唐破風上の龍頭には変化はないが、大棟の龍頭が造り変られていることがわかる。大正11年までの龍頭棟飾りが、原形をとどめていて威厳を備えている。

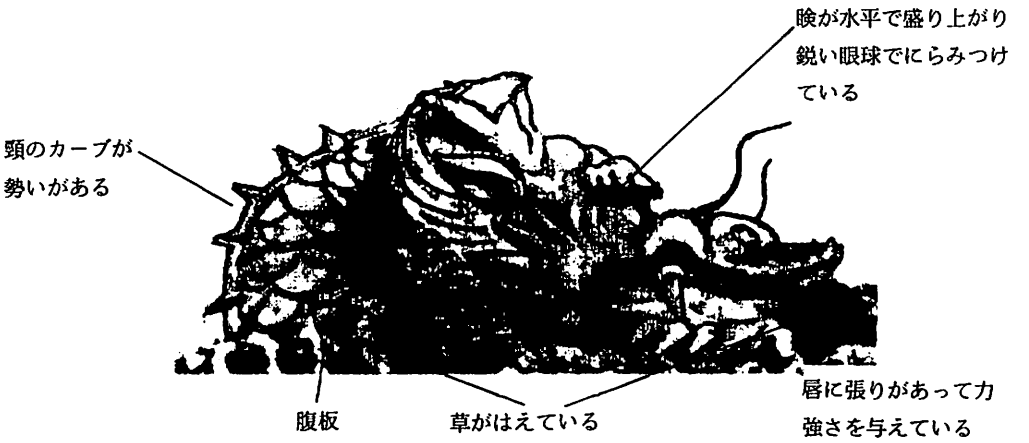


写真③－１　大正11年　大棟龍頭と唐破風上の龍頭

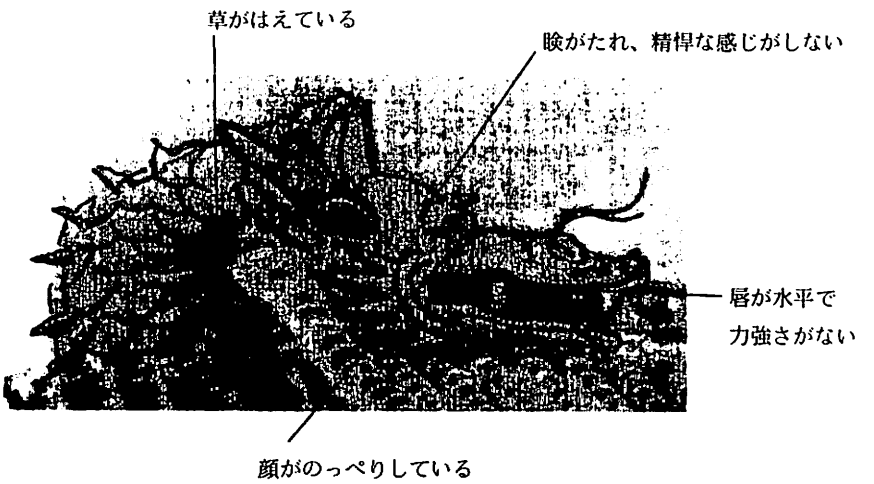


写真④－１　大正13年　大棟龍頭と唐破風上の龍頭

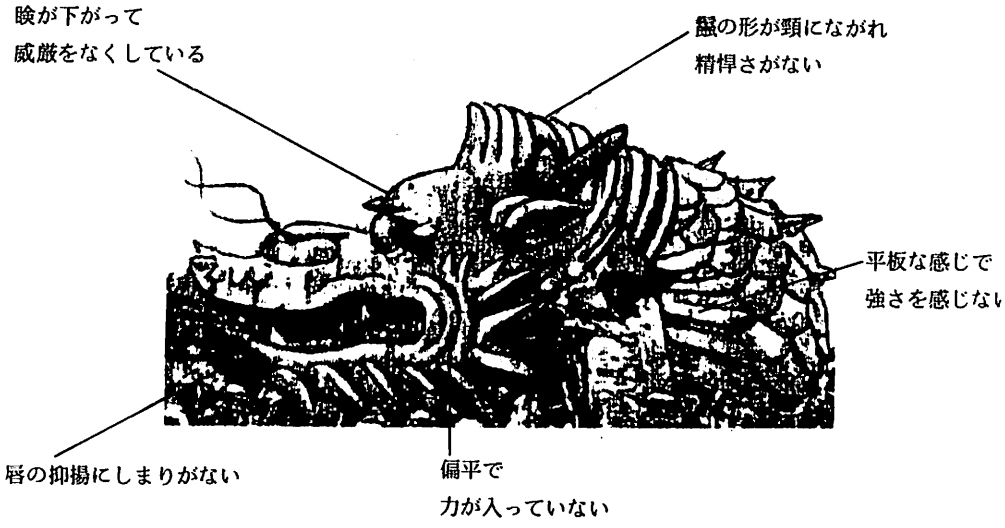
・龍頭棟飾り部位の比較



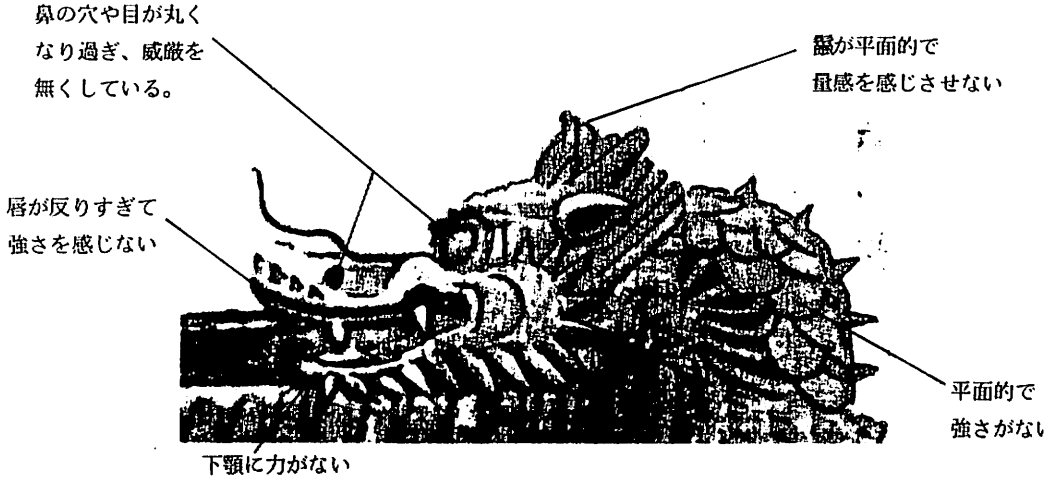
大正11年（1922年）「沖縄文化の遺宝」より



大正13年（1124年）「沖縄文化の遺宝」より



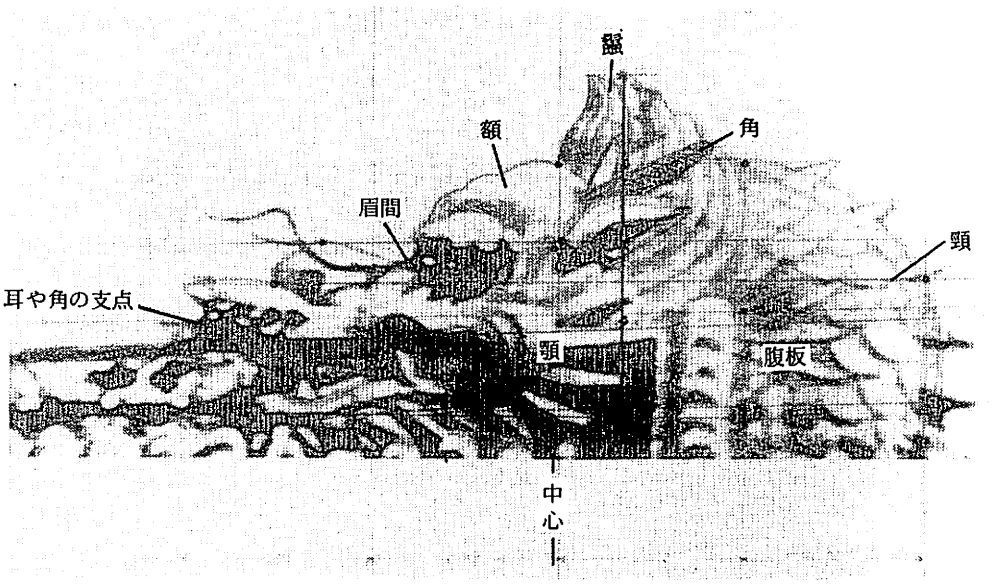
撮影年不明（文化庁蔵）



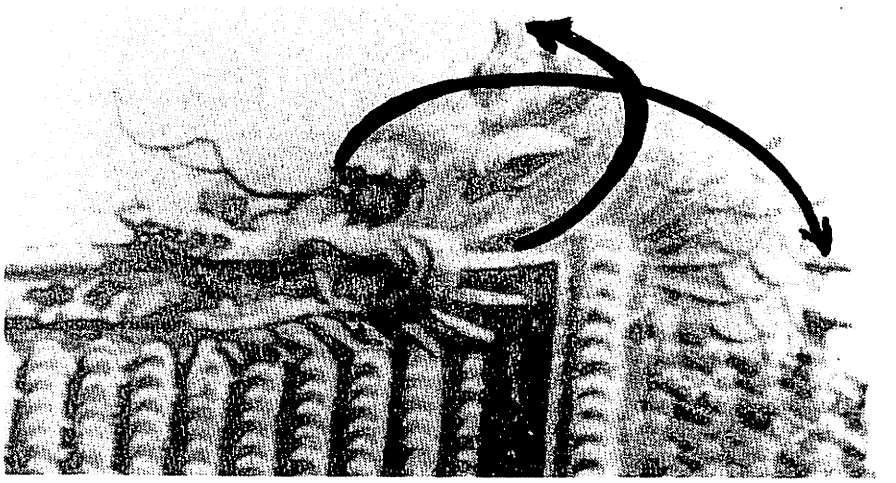
昭和修理後（文化庁蔵）

六、石膏原形製作の経緯

平成４年完成した首里城正殿の復元に際して、筆者は龍頭棟飾りの縮尺石膏原形を製作した。製作にあたっては、写真の龍頭の形態を分析する事から始め、大正13年以降の龍頭において形態に変化があっても、大棟を噛んで低く構えさせている点では共通している事が解明できた。龍頭は、首里城正殿の屋根の面積に対しての大きさの比率を念頭に置く事が、最も肝心である。龍頭の形態の把握がなければ、屋根の要としての位置付けができないと考えられるが、ややもすると高く、大き



原形の形態を分析すると、龍頭が細長いという印象を与える。長さの比率は、棟の延長線上にたって顎を中心とすると、口の先端までの長さと、頸の外側の位置までが同じ長さである。

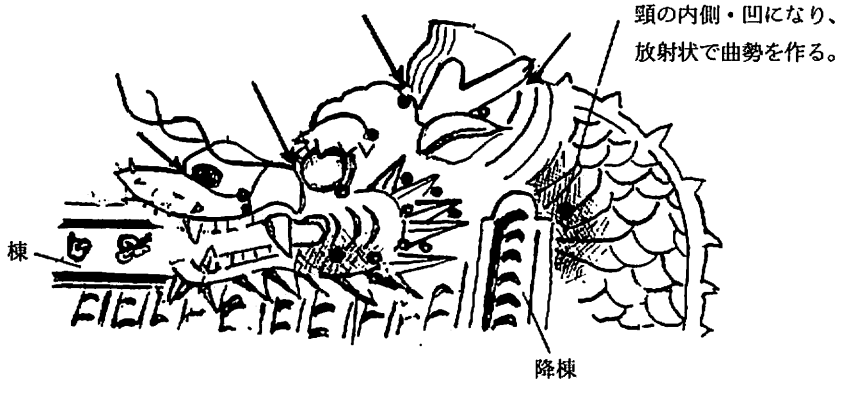


龍頭の口辺部は薄く、眉間から額にかけての稜線は頸につながって弧を描いている。更に顎から鬣にかけて反り返る様に弧を描く形が、最も基本的な要素である。

くとらえる傾向がある。大き過ぎ高過ぎる龍頭では、首里の高台の気象条件が考慮されていない事となるし、建物全体の調和が欠けて重たくのしかかる。王朝時代もここに視点があったと考える。

復元製作に当たって写真を検討してみると、明治期の撮影から大正11年に撮影されたものが、王朝時代の龍頭の原形を残している事が分かったのは、前述の通りである。その原形の形態を分析すると、龍頭が細長いという印象を与える。長さの比率は、棟の延長線上にたって顎を中心とすると、口の先端までの長さと、頸の外側の位置までが同じ長さである。形を見ると口辺部が薄く、眉間から額にかけての稜線は頸につながって弧を描いている。更に顎から鬣にかけて反り返る様に弧を描く形が、最も基本的な要素である。細部に当たっては、唇の尖端の形や抑揚に留意し、下顎の付根を締める事、頸の内側に凹部を造り、腹板を放射状にする。瞼はほぼ水平にし、眼球は大棟の中央に向けて鋭くする。耳や角の角度は、棟と唇の先端の交わる所を支点にして傾斜を作る。鬣は、顎が中心となっている垂直線上で額と交わる接点を付根にし、波状の立上がりを造って盛り上げる。要所要所を抑さえて起伏をつくり、全体を引き締める。龍頭の上面は、国内調査の際に見た、鹿児島神社の手水舎にある懸樋の石材龍頭を参考にしたが、細部の形状に違いがあったため、筆者が過去に復元した園比屋武御嶽の棟飾りにあたる鴟吻の形状にも共通する部分があったので参考にし、総合的に判断した。

石膏原形の製作にあたっては、粘土で縮尺復元製作したものを、平成２年、首里城正殿実施設計の段階で、縮尺石膏像として製作した。その際は、「龍頭棟飾り」のみを検討し、台座にあたる屋根の部分は拝殿図に添った形で仕上げた。しかし、後になって屋根の図面は、実際の工事にはいってから使われた図面とは違い、途中で訂正されていたことを聞いた。



- 口辺部は、棟に添って薄い肉付け（形成）ではあるが抑揚があって勢いがある。
- 鬚が放射状になっているのも特徴で、長さ、太さによっても表情が異なっている。
  原形をとどめている（明治から大正11年まで）ものは、大正13年から昭和（戦前）までの龍頭に比べて、鬚の長さ、太さ、角度が工夫されている。
- 龍頭全体は低く、特に・⟶の部分の抑え方によって表情が左右される。
- 唇の尖端、鼻、眉毛、眼球等の形は、この龍頭の印象を左右する重要な箇所である。

・鹿児島神社の手水舎にある懸樋の石材龍頭

側面

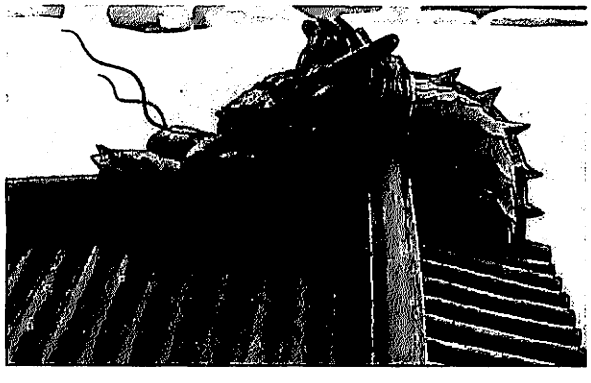
一見首里城正殿の龍頭に似ている様に見えるが、形態の違いがわかる。

正面上から

・縮尺復元製作過程

全体の形を戦前までの写真を基に大まかに造り検討する。この時点から触覚髭を取り付ける。

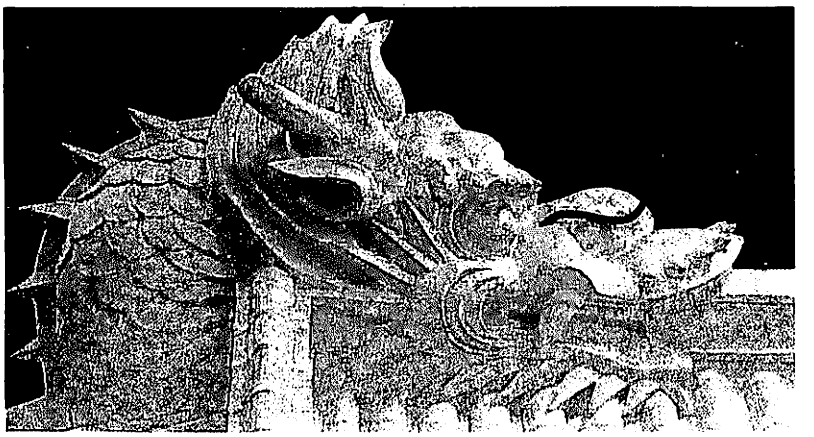
徐々に細部も造り、全体の雰囲気を掴む。残された写真と出来る限り近い状態で見て造るが、肉眼で見るのと写真とでは違いが生じるので、その都度同角度からの写真を撮り、判断する。



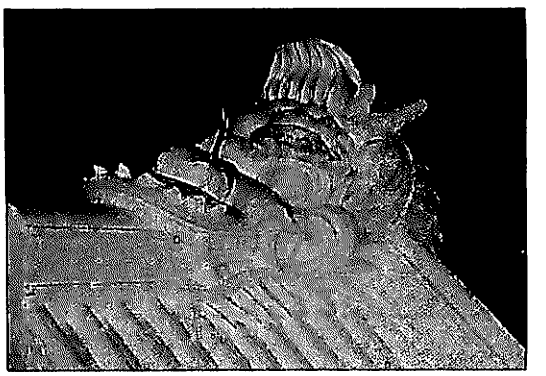
完成像

鱗等も完全に付けて検討した結果、頸部の曲がり具合に勢いが無いことに気付き、直す。また、内側の放射状の腹板も、凹凸をはっきりさせ頸の流れに添って造り直し、背鰭の曲線の輪郭を大きく盛り上げた結果、迫力を感じるようになった。

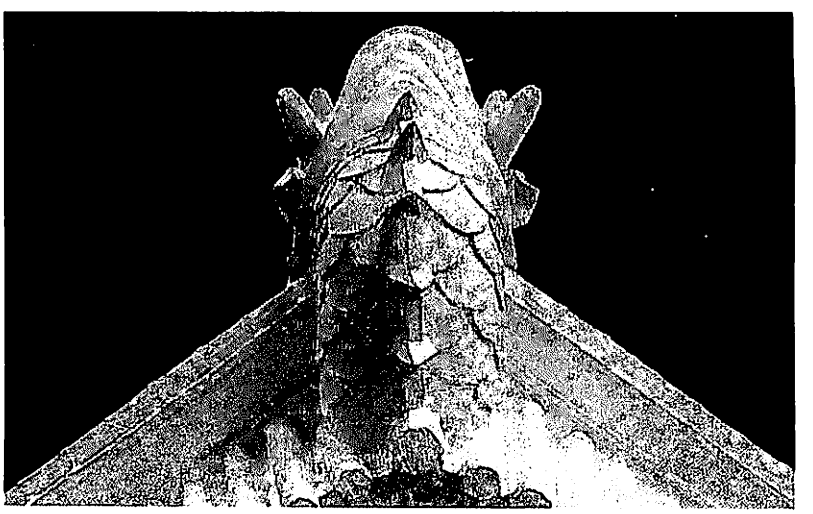
• 縮尺復元石膏像



側面像



斜側面像



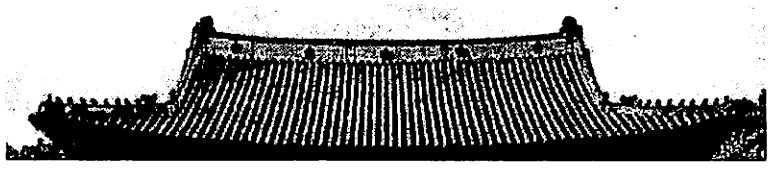
後面像

七、現在設置されている大棟の龍頭について

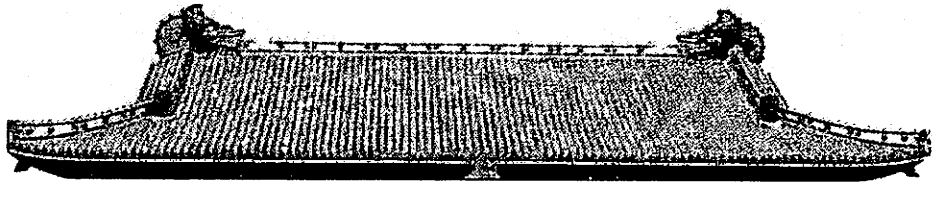
首里城正殿の全景を見ると、製作時の資料に使った写真にある龍頭より、龍頭がはるかに大きく造られている。二層になっている屋根の上層だけと比較しても、明治、大正、昭和（戦前）のいずれのものより龍頭が高く、浮いて設置されている。また、降棟の獅子の大きさと比較しても大きく、屋根の面積に対しての大きさの比率を考えても大きく見える。

現在は、正殿全体が造り立てで、壁のベンガラ色や瓦、漆喰等も真新しく、唐破風も色鮮やかなため、色彩の効果で、龍頭が大きすぎ浮いて設置されていることに気付きにくい。

龍頭は、釉薬を施した陶製である。明治、大正、昭和（戦前）の龍頭は漆喰で造られている様であるので、陶製とは質感や色彩による面積量の感じ方の違いがあるにも拘らず、龍頭を低くさせてはおらず、屋根に張り付くように構えさせる事も配慮されてない。その結果、復元とは程遠いものとなっている。

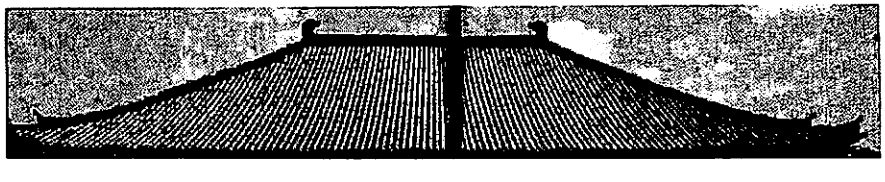


韓国　仁政殿の屋根



平成４年復元　首里城正殿の屋根

中国　皇極殿の屋根



日本　唐招提寺金堂の屋根

屋根の面積に対しての棟飾りの大きさを比較すると、
首里城正殿の棟飾りがいかに大きいかが分かる。

復元作業は、縮尺石膏像と屋根の図面を基に長さ約3.2m大に製作する事が、請負業者によって進められた。筆者は、縮尺石膏像を造った事もあって、製作途中の様子を二回見たが、

・製作する場所としては、

①龍頭全体が一目で見渡せない。

②龍頭が前後左右から確認がとれない。（可動式でなく、固定されている。）

・製作に当たっては、

①龍頭の骨組みが、木材によって造られ、その上からポリエステル樹脂（FRP）で牙、髭、角等の細部まで形成されている。

②さらに、その表面を土粘土によって肉付け（形成）し、仕上げる工程をとっている。

以上の様な状態であった。また、土粘土による肉付けを見たが、その時の製作状況は、土で細部まで表現されているが、筆者の製作した石膏による縮尺復元像とは、似ても似つかない形態であった。

①全体の比率が石膏像とは、違っていた。

②顔面が極端に大きく、頸の曲りも極端である。

③棟の延長線としての位置付けがない。また、屋根（庇（ひさし）も含めて）の傾斜した延長及び瓦の大きさと本数に対する認識がないし、降棟の延長も造られてない。

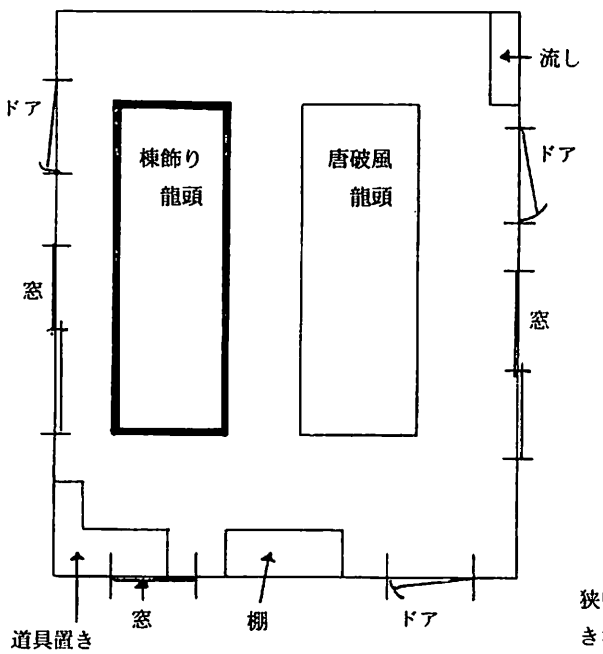
この様な状態を見て、修正に手を貸し、提言もしたが、根本的な改善にはならなかった。

改善できなかった理由

①骨組みが硬いポリエステル樹脂で覆われているため、根本的な修正ができない。

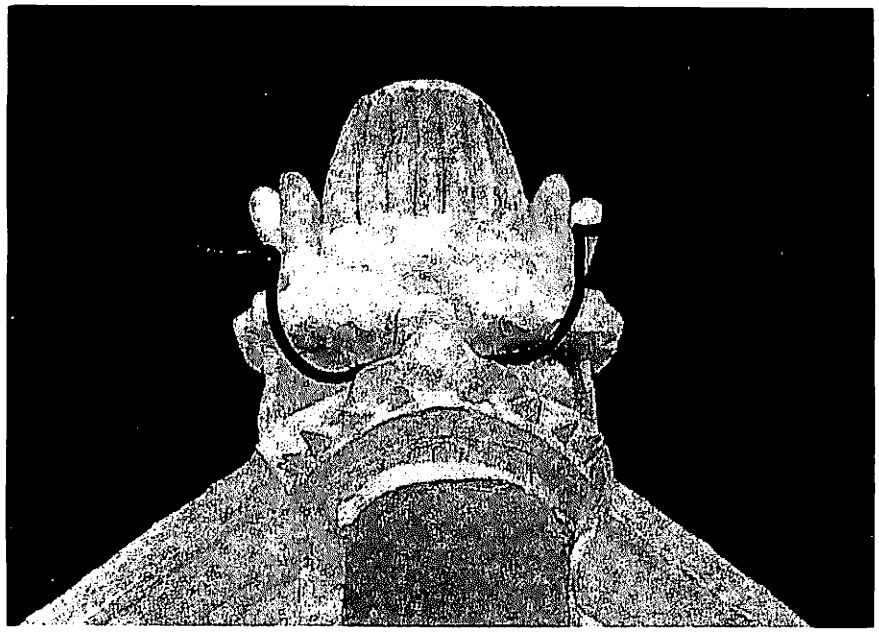
②龍頭を石膏像の比率に近付けるには、頸の部分と鬣（たてがみ）に量を足さないと調整ができないが、量を足すと設計図の寸法と違いが生じる。（結果として量を足したのが現在設置されている龍頭である）

③修正しても、大きすぎて締まりのない形態に、石膏による型取りがなされたので、石膏型からもう一度、粘土におこし、修正することを求めたが、工期と費用を考えると再度の製作はできないとされ、現在取り付けられた形になっている。



龍頭棟飾りが製作された工房配置図

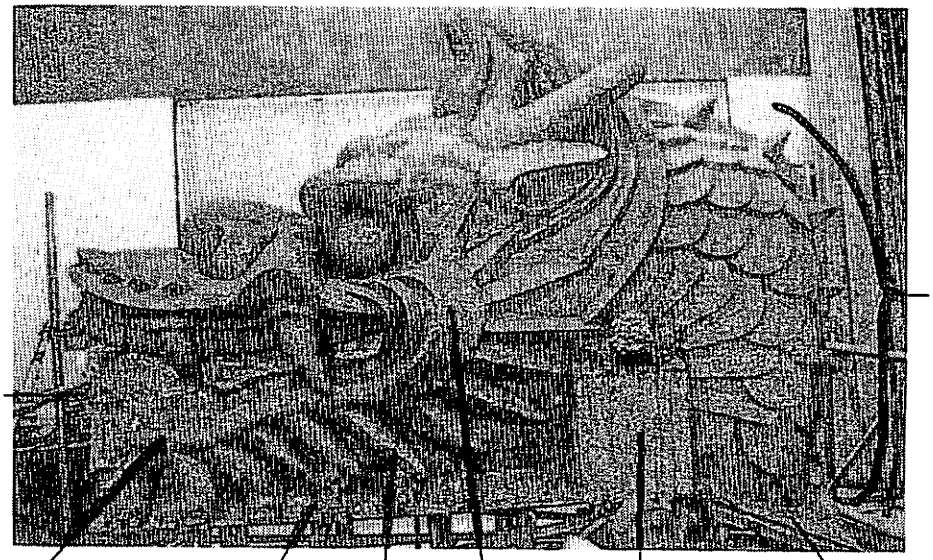
狭い部屋であるので、棟や瓦の位置づけができない状態で製作された。



縮尺石膏像　龍頭正面

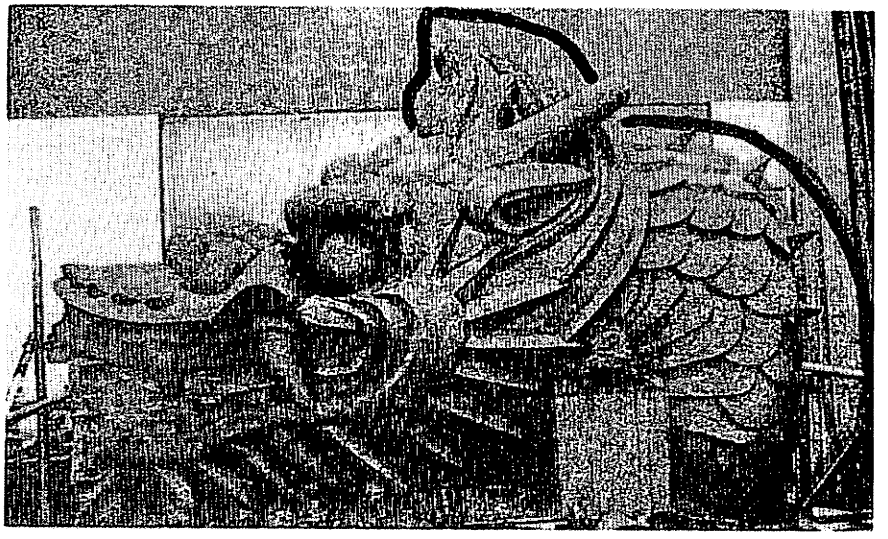
側面、後面が見渡せず、正面の写真を撮るにも壁が邪魔
をして十分な間隔がとれなかった。

縮尺復元石獅像

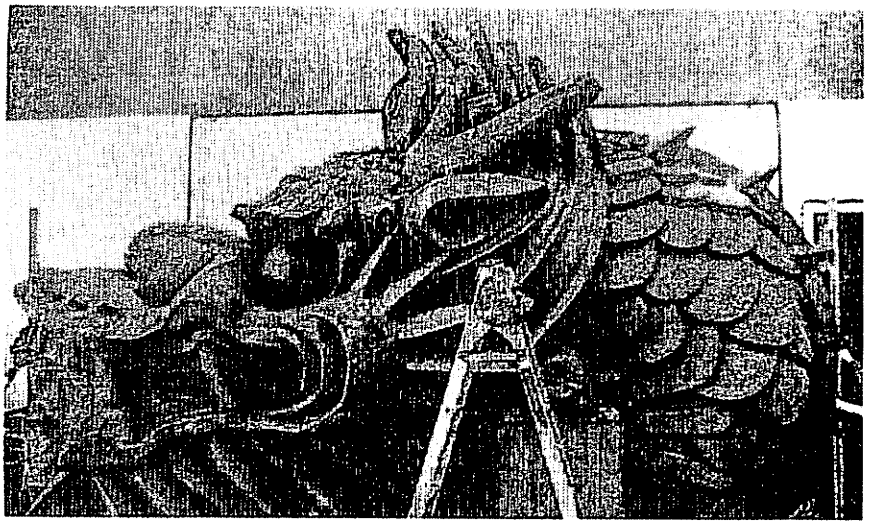


平成２年11月26日に始めて見た製作状況。棟、瓦が位置づけられていない。龍が棟を噛むという条件からすると、棟の延長線上に龍頭の顎が位置づけられる事が、最低限の条件である。瓦の傾斜、本数を考慮して製作しなければ顎鬚は屋根になじまない。

上掲の縮尺石獅像と比較して写真からみても顔面部がやたらと大きい。また頸の曲りが極端であるため、頭の比率が狂っている。その比率を修正したが、骨組みが硬いポリエステル樹脂で造られているため、改善する事ができなかった。したがって、唇の先端、鼻、眉間、鬣、顎、口辺部の周辺辺等の特徴もだせなかった。



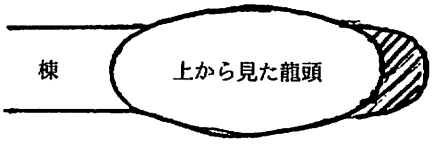
平成２年11月26日の状況。筆者が顔面部を修正したが、根本的に形が直せない状態。



平成２年12月23日の状況。口辺部が大きく、全体も極端に大きい。

平成２年12月23日、一月後の状況である。反対側を修正しただけで、全体の比率、顔面部の大きさや顎の高さ等、改善されていない。やむなく頸に量を加える事によって、長さの比率は原形に近付けられたが、加えた量によって底面積及び盤の高さが設計と違ってきた。しかし、関係者はこれで良いとした。部位の特徴も修正されないままに型取りされる。

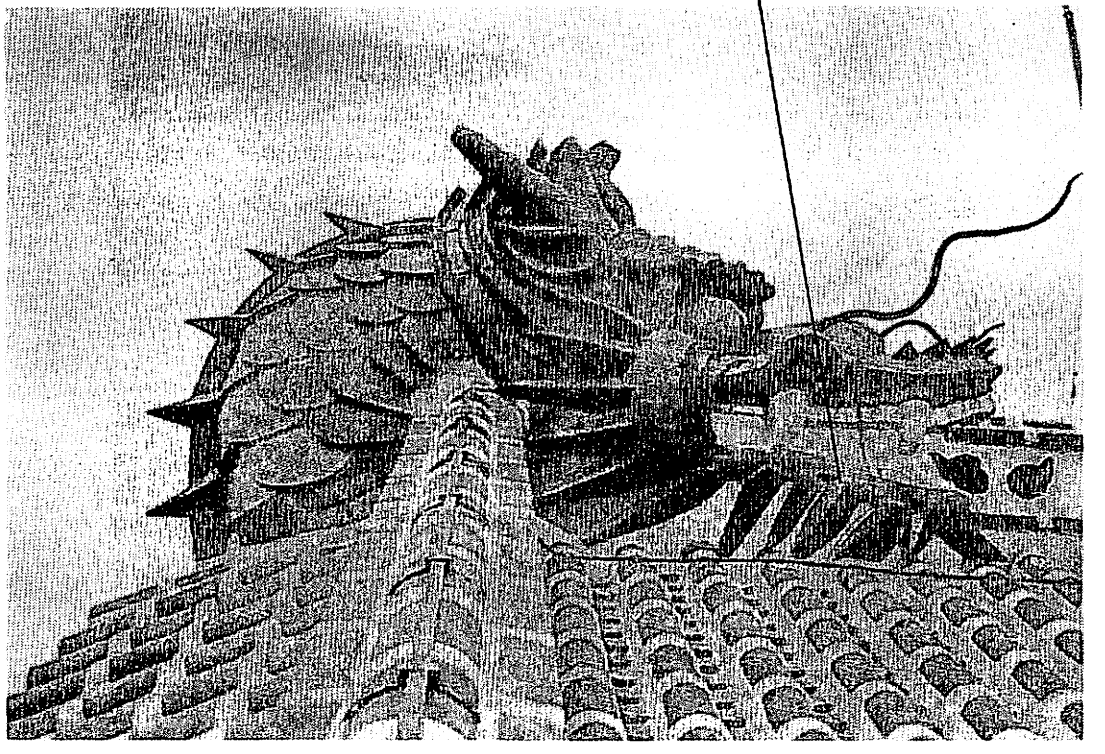
改善されなかった箇所は、焼物にする時点で修正可能だと関係者が言ったのが、現在設置された龍頭であるが、表情のちがった形態になっている。



上から見た頸の底面。
斜線部分が量を加えたことによって大きくなった。

現在設置されている龍頭においては、顎が棟より上についているために、顎鬚全体が極端に傾斜している。本来ならば、鬚は瓦に添って張り付くようになっている。また、下顎の盆が無いために、龍というより、鳥の嘴のように見え、そのために力強さがない。

生態学的にも、例えば、ハブが獲物を捕らえる時、下顎をあてて、上顎で噛むかたちをとる。その様な事から考えても龍頭は、棟を噛んでいない。

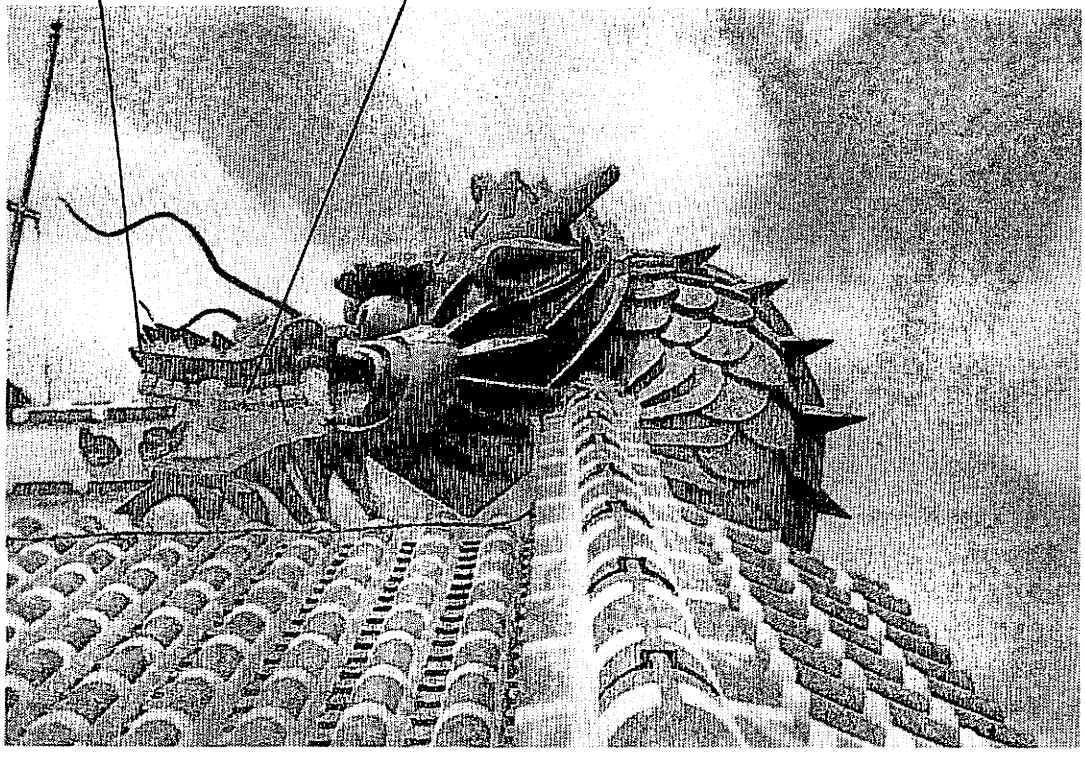


龍頭棟飾り・吽形

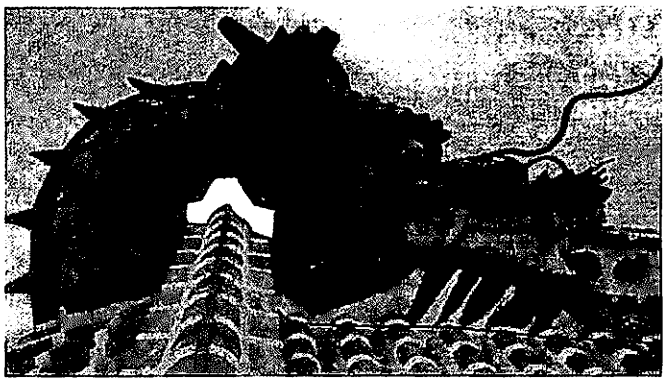
阿形（口を開いて構える）、吽形（口を閉じて構える）については、一般的に口の開閉によって表現されるが、屋根の棟に取り付けられている形態であるので、阿形・吽形の形状にはさほど変化は無く、牙の開閉によって表現され、わずかに口辺部の抑揚や眉間、鬣等に変化を付けて阿形・吽形の形態を造りあげている。現在設置されている龍頭にはその面影は全く感じられない。それは一つの型から二つの龍頭にしたからである。

唇の先端は、尖的で薄く、鋭い雰囲気をもっているが、現在設置された龍頭は、分厚くなっていて、造りの悪い入歯を思わせて威厳がない。

歯並びの形は、唇の先端から牙にかけて弧を描き、顎へと連なっていく。歯並びは、棟の幅の中央部よりやや上方に位置づけられるのが本来の形状であるが、現在設置された龍頭は、棟の上に添う状態で、棟を噛むかたちになってないため、原形とは大きな違いになっている。

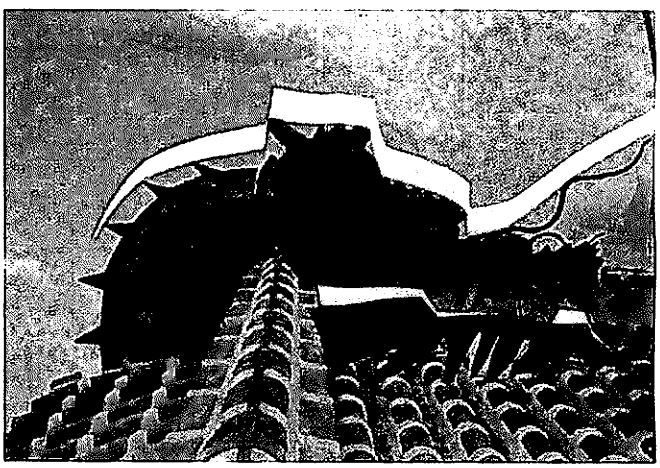


龍頭棟飾り・阿形（あぎょう）



瓦を葺いた職人によれば、降棟（くだりむね）と龍頭との接点には、約20cmの隙間があり、漆喰で埋めてある。（白い部分が隙間）

大正11年（沖縄文化の遺宝）



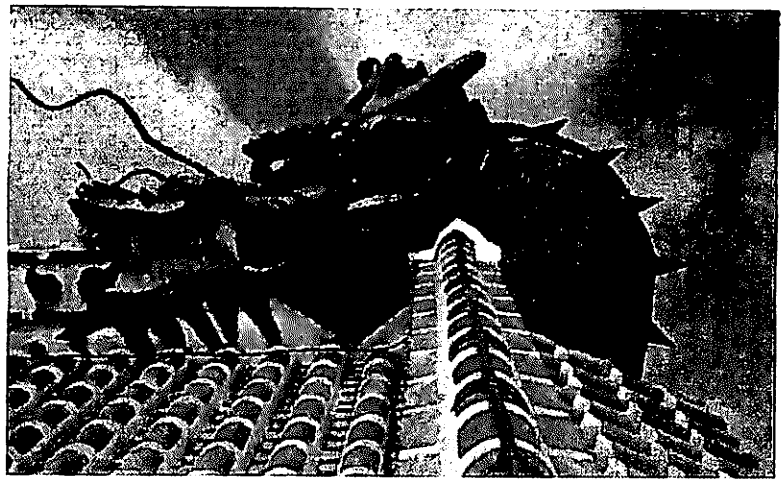
吽形（うんぎょう）

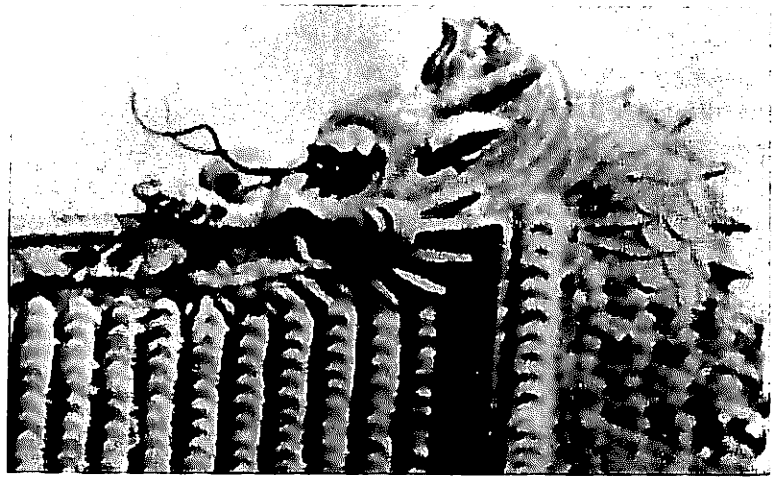
最も原形を備えていると考えられる龍頭の写真は、低く構えている。それと比較するために、現在設置されている龍頭を写真に撮り、下記の条件に当てはめて写真を切り張りしてみた。

- 顎（あご）を棟に合わせて水平に位置付ける。
- 下顎の顎鬚（あごひげ）を屋根の瓦に張り付ける。
- 降棟と龍頭との接点の隙間を無くす。

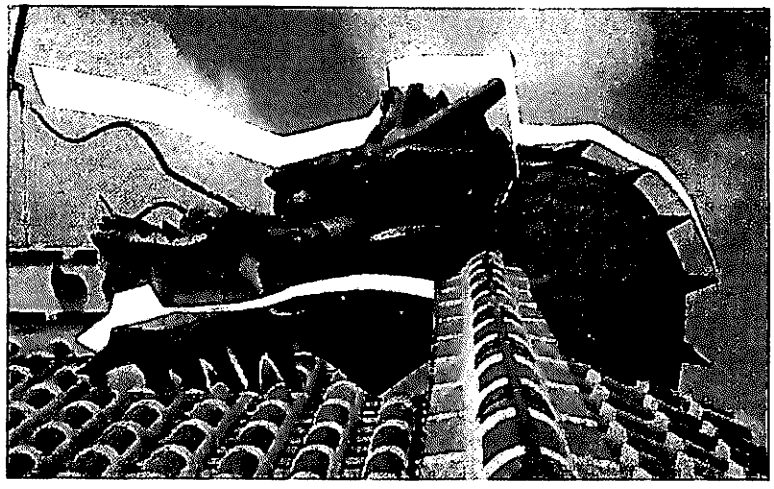
白く見える部分は、ずれが生じたものであり、龍頭がいかに低く構えていたかがわかる。

部位（唇の先端、鼻、眉間、眼球、額、鬣、口辺部の周辺、牙、顎等）の特徴は、原形とはほど遠いため、復元とは言えず、創作と言う他はない。

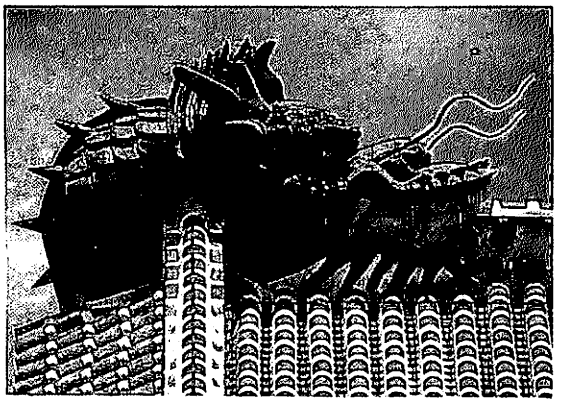




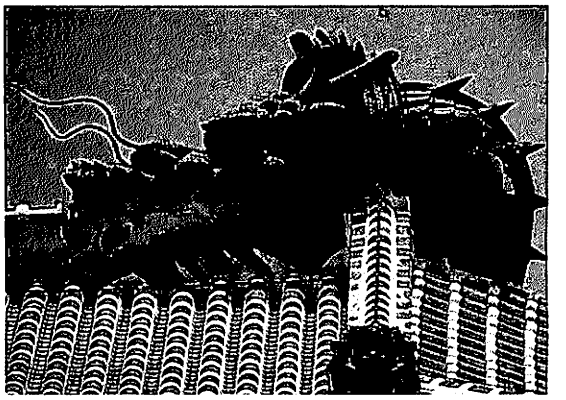
撮影年不明（文部省）



阿形（あぎょう）



吽形



阿形

結果として、型取りする前の龍頭と現在設置されている龍頭は、基本的には変わらず、次の様な欠点が生じた。

- 顎が棟より高い。
- 下顎の顎鬚は、屋根の瓦に張り付いていない。
- 龍頭全体が屋根より浮いている。
- 首里城正殿全景で見ると、龍頭がはるかに大きい。

八、屋根（龍頭）の色彩

龍頭棟飾りは前述したとおり首里王府の史書「球陽」に、1682年の正殿大修理の際、平田典通によって「五彩」の焼物とした記録があることや、出来るだけ古い資料を取り入れるとの申し合わせによって、今回の復元では、釉薬（うわぐすり）を施した焼物とすることになった。しかし、龍頭棟飾りの焼物としての形態は、「球陽」には無く、明治時代以降の写真に基づいて形態を復元することになった。残された龍頭の写真は、漆喰の様であり、彩色が施された痕跡は確認出来なかった。残辺遺物に彩色が施された眼球部分（琉球大学風樹館蔵）があるが、群青、緑青の色は残ってはいるが、薄く、焼きもあまい。

今回の復元は、「五彩」を取り入れるという事になったが、釉薬をどの様な色にするか、或いは龍頭の形態との関連は十分検討されたかは聞いていない。

中国[1]では、棟飾りや隅棟に施される鬼龍子（きりゅうし）等には、それぞれに一定の色の釉薬が施されている。それぞれの色には意味があると言われ、黄、緑、青、赤、黒が使われている。

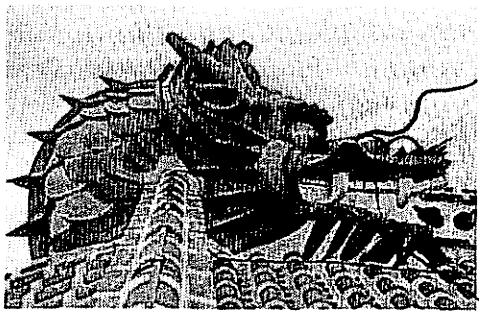
- 黄色はもっとも重要な色である。権力、偉大さ、富をあらわす色とされる為、帝王を象徴し守護する色として、王の装束、使用する物、住居（宮殿）に使用されている。
- 緑と青は永久、平和の象徴であり、帝王の宮殿の屋根瓦はたいてい緑と黄色である。
- 赤は、歓喜と多幸な生活の色である。
- 黒は、破壊、壊滅の色である。
- 白は、純潔と光明の色であるとともに喪の色である。

中国では以上のような目的で色彩が使われている。また色彩がその効果を発揮できるのはその色を見る事が出来る範囲内とされるので、中国ではきらびやかな色調が非常に尊重され、けばけばしい色彩が多用されている理由もここにある。

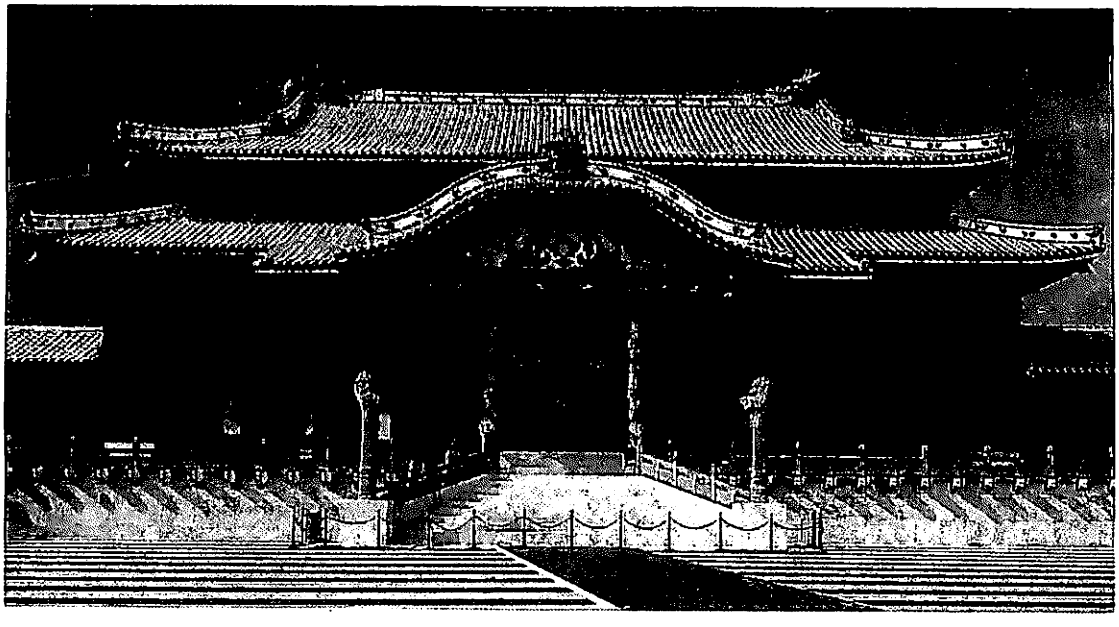
琉球は中国の影響を受けていると考えられるが、どの様に色が使われていたのか。「五彩」は黄、緑、青、赤、黒の五色として簡単にかたずけていいものか、陶器の三彩風と考えた方が良いのか、判断が難しいところである。

中国の紫禁城の屋根は、黄と緑で統一されてい

て、瓦や彫刻等の模様が細かく、色も細かく塗られ、軒や棟等全てきらびやかな色調である。それに比べ琉球王朝時代の首里城正殿は、龍頭棟飾りに代表されるように大造りであり、瓦の遺物を見ても中国の瑠璃瓦のような釉薬が施されてはいない。また、木造部分には日本的要素が取入れられている。この様に考えると風土や素材からくる形態や色彩感は紫禁城と同じと言うわけにはいかないし、また紫禁城の屋根は全体に釉薬が施されているのに対し、首里城正殿は、龍頭棟飾りだけに釉薬が掛かる事によって、瓦と質感の違いが生じている。出来上がってすぐの時点では龍頭棟飾りと瓦は調和が取れるとは言いがたいが、時間の経過により古色が付き、また退色した時の事を考えると、龍頭棟飾りが低く張り付く様に造ってあれば、正殿全体の調和はおのずととれてくると考える。



顎が浮いているために、
下顎は細く見える。



平成に復元された首里城正殿と龍頭拡大写真

九、むすび

復元された首里城正殿を全景で見ると、屋根全体の面積に対して龍頭棟飾りの占める大きさ（量）の比率が格段に大きく見え、重たく浮いた印象を受ける。そのために大龍柱や勾欄全体が小さく見え、貧弱にさえ感じられる。復元された龍頭は、陶製になり釉薬が掛かることによって重量感の変化があり、しかも陶製であるため漆喰と違って硬い感じを与えるため、正殿全体のバランスに大きな比重を占める。しかし今回の復元ではその様な事を無視して、屋根全体を考え龍頭の占める割合を量的にとらえて取り組まなかった事により、形態に大きな狂いが生じた。龍頭が棟を噛んでおらず、全体が浮いて下顎の顎鬚が瓦に張り付いていないことは、葺かれた瓦の位置付けがなされていないためである。下顎が細く棟に馴染んでいないために、遠くから離れて見ると、鳥の嘴（くちばし）のようにも見え、龍の面影を無くしている。顎鬚等はタイルを張り付けるように取り付けているので、なおその感を強く印象づけている。また、これらの事には、狭い部屋で製作され、しかも固定された状態であったため、角度や距離を考慮して見る事ができなかったと言う製作時の作業状況の不備が遠因としてあった事が明らかに現れている。

首里城正殿全体の美しさには、屋根の関わりが大きいと思われる。屋根の棟の稜線や、隅棟の角度による変化によっても随分印象が違い、各国の屋根の特徴も、ここに関わってくる部分が多いと思われる。大棟に取り付けられる棟飾りは、形の大小、量の多寡によって、屋根を美しく見せるか、或いは荘厳な雰囲気をつくるかの決め手になる要素のひとつになる。

首里城正殿の龍頭棟飾りは、規模の小さい正殿でありながら、大きく造って調和のある形にしている。台風の襲来が多い気象条件も考えて、低く構えさせ、おおらかな造りの中に要所を抑え、生命感のある迫力を備え、独自の形態を造っている。王朝文化の象徴でもあり、沖縄の風土から生まれた造形物を後世に正しく伝え、歴史・文化の中で造形物が単なる装飾物ではないこと、また時代性があることが必要と感じる。

なお、この拙論を著すに当たり、写真・資料の提供、助言・示唆を与えてくださった関係者に深く感謝致します。

参考・引用文献

① 「文化財用語辞典」　1976年（昭和51年）11月　編集　京都府文化財保護基金、第一法規出版株式会社

② 鬼龍子―中国の鬼瓦―　エードワルド・フックス著　1964年（昭和39年）8月　刀江書院編集部訳　刀江書院

③ 「首里城正殿実施設計（彫刻）報告書」　1990年（平成2年）3月　沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所

④ 「写真集　沖縄」　1984年（昭和59年）9月　那覇出版社

⑤ 「中国美術全集　建築芸術編1　宮殿建築」　1987年12月　中国美術全集編輯委員会編　中国建築工業出版社

⑥ 「文化庁監修　国宝　建造物」　1984年（昭和59年）12月　毎日新聞社

⑦ 「国宝建造物沖縄神社拝殿図」　1933年（昭和8年）頃作成　文化庁蔵

⑧ 「沖縄文化の遺宝」　鎌倉芳太郎著　1982年（昭和57年）10月　岩波書店